塚田嘉信氏年譜

本地　陽彦／編纂・作成

［例言］

※本「年譜」は、塚田嘉信氏の「日録」作成を目的に起稿した。本来であればその完成後におおやけにすべきものであるが、氏のコレクション整理自体が中途の段階であり、結果として本稿もまた未完であり、「経過報告」とならざるを得ないことを最初にお断りしておく。

※本「年譜」は、基本的に国立映画アーカイブが塚田嘉信氏ご遺族より受け入れた「塚田コレクション」（仮称）の資料類を主に「出典」として採録、作成する（本地所蔵による、塚田氏本人から譲り受けた塚田氏の著作もこれに含める）。著作、著書以外は、それぞれ各項目に、その出典（資料名）を記載する。年度、年月日が不明なものは、その都度「推測」等の表記をする。年度が明らかで、月、日が不明な事項は、その年度の末尾に（月、日を空欄のまま）記載する。同日でも、事項が異なる場合は日を付して行を改めた。事項の多くの場合、出典とする資料にも曜日の記載は無いが、『20世紀暦』（1988年11月、日外アソシエーツ編集部編、日外アソシエーツ刊）によって補記する。資料に旧字（正字）で記述されている事項は、可能な限りそのまま転記する。塚田氏の著作、私家版等は全て原本より採録し、そのタイトルを、著作（雑誌等掲載の文章）は「　」内（収録誌名等は『　』内）に、自身の刊行物は『　』内に、それぞれ**ゴシック書体**で表記する。塚田氏自身による逐次刊行物の**号数**、**№**は、判り易さを考慮して、『　』内にタイトルと共に記載し、表記も資料に記載されたままを転記する。従って、数字の表記を統一していない。著作、私家版の発表日、発行日は、資料に記載の「発行日」による。原則として、現段階では明らかな「誤記」に気づいた場合に限り、※記号を付して（※　）内に正しい情報を補記する。

※塚田氏が自身の見た映画作品を記録した『「昭和20年以後見た映画」（昭和29年3月21日）』という表題のノートが残されている。昭和20（1945）年から30（1955）年にかけての記録を、後日「清書」したものと思われるが、いわゆる大学ノート（横書き）に万年筆を用いて、日付、作品名、館名、を記録したものである。戦後に集中的に鑑賞したことが判るものであり、取敢えずは、ノートの記録そのままを転記する。作品の、製作国、正式タイトル、製作会社や監督名、映画館名に就いての考証、裏付けは後日に確認することとする。但し、単純、且つ明らかな「誤記」と思われる記述に就いて、※記号を付して（※　）内に注記する。また、判読出来ない文字の場合も、（※　）内にその文字を□で注記する。尚、今回の活字化は、年譜全体のバランスを考慮し、また紙幅も限られていることから、「昭和22年7月末」までの記録とする。

※塚田嘉信氏の業績と深く関わる人物、若しくは文献等、塚田嘉信氏を理解する上で必要と思われる事項も逐次記述する。

※2022（令和4）年10月15日、塚田嘉信氏令妹に当る佐々木裕子氏へのインタビューを行った際、塚田氏御尊父の松司氏が作成された『私の一生』と題する、所謂、色川大吉氏の言う「自分史」の厖大な草稿の存在が明らかにされた。その様子は別掲の「佐々木裕子氏インタビュー」の中で紹介したが、残念ながら本稿入稿までにその内容を精査する余裕が無く、殆どここに反映することが出来なかった。塚田嘉信氏の幼少期のことは、資料も無く、また今回は必要な調査も時間的に困難なこ

とから、空白のまま提示することをお断りしておく。同様に、幼少期以降も、調査が及ばずに何も事項の記入が無い年度もあるが、この稿が「未完」故、空欄のままとしておく。

塚田嘉信氏年譜

◇昭和4（1929）年：0歳

・10月28日（月）：塚田松司、靜子の長男として生まれる。「東京市本郷区湯島天神町壱丁目弐拾番地ニ於テ出生　父松司届出」【「昭和参拾四年九月拾八日」発行の戸籍謄本による】。父・松司は、明治35（1902）年9月25日、塚田清次郎の長男として生まれる（但し、戸籍には「出生届出明治参拾五年拾月参日受附入籍」とあり。松司氏も湯島生れである）。母・靜子は、明治43（1910）年9月28日、山内愛之助・ツネ夫婦の四女として生まれる。二人の婚姻届出は「昭和四年四月拾弐日受附」。嘉信氏の兄弟は、弐男・精司（昭和6年12月15日出生）、長女・照子（昭和9年1月27日出生）、弐女・裕子（昭和10年4月14日出生）、参男・昌宏（昭和12年8月13日出生）。但し、長女の照子は、出生後間もなく、その年の2月24日に死亡している。尚、出典の戸籍謄本は、「昭和弐拾年参月拾日焼失につき同弐拾四年参月弐拾参日再製」されている。いわゆる「東京大空襲」で焼失している。また「昭和弐拾弐年参月拾五日行政区加畫変更ニ付キ本籍欄ヲ文京区ト更生」とある。御尊父松司氏の記録（「私の一生」と題した自伝草稿）によれば、大正12（1923）年の関東大震災では「土蔵を残すのみにて家は全部焼失し」て、「大震災以前のものは全部焼失」し、更に「昭和十九年の大空襲には震災に残った土蔵も遂に焼失した為二度の火災に依りこれ迫の記録は全部焼滅してしまった」と言う。従って、塚田嘉信氏に関わるものも空襲以前のものの多く、或いは殆どが失われたと推測する。幼少期を空欄のままとする所以である。

◇昭和17（1942）年：13歳

・ 4月　　日（　）：第三東京市立中学校（翌昭和18年に都立豊島中学校となり、敗戦後の昭和25年に都立文京高等学校となる。現在の住所は、豊島区西巣鴨1丁目1番5号）に入学。「軍国主義のすごい学校。朝は寒膚摩擦なんかをやるんで肋膜から肺結核になっちゃって一年休学したんです。」（『日本映像学会映画文献資料研究会報』第1号、1992年11月10日、日本映像学会映画文献資料研究会刊）。

◇昭和18（1943）年：14歳

・ 8月　　日（　）：福島県の飯坂温泉千人風呂通りに疎開する（「私の一生」）。

・ 9月　1日（水）：母静子が最後に飯坂に疎開。父松司は東京に残る（「私の一生」）。

◇昭和19（1944）年：15歳

・ 4月　1日（土）：この日発行の、雑誌『新映画』第1巻第4号（日本映画出版株式会社）を購入（日付は雑誌奥付発行日による）。「一番最初に買った雑誌というのが『新映画』の19年4月号で「轟沈」というやつ。映画雑誌というのはそこからずっと買い始めた

んです。」(『日本映像学会映画文献資料研究会報』)。

・　月　　日(　):福島県立福島中学校、第二学年(昭和十九年度)の「通知表」あり。「二組生徒」。昭和17年に第三東京市立中学に入学後、昭和18年を休学し、この年から疎開して福島中学の第二学年へと転校したものと推測する。塚田氏の御令妹・佐々木裕子氏によれば、福島在住は、戦中の「疎開先」である。「昭和29年2月25日現在」の『福島県立福島高等学校同窓会名簿』収録の「母校沿革概要」によれば、同校は「明治三十一年創立、同年四月福島町尋常高等小学校仮校舎内に於て開校し福島県第三尋常中学校と称し五月一日より授業開始」、「明治三十三年四月福島県第三中学校と改称、同三十四年四月一日福島県福島中学校と改め、同月二十七日更に福島県立福島中学校と改称す。」とあり、同名簿の「第四十七回卒業生(昭和23年)」の中に塚田氏の名が記載されている。また、昭和23(1948)年4月に福島県立福島高等学校が開設される為、第47回は中学校として最後の卒業生である。

◇昭和20(1945)年:16歳

・1月　1日(月):疎開先の福島県の「福島東宝」で「かくて神風は吹く」を見る。この映画鑑賞記録は、『昭和20年以後見た映画　(いつ、なにを、どこで　そして誰と　又いくら使ったか　etc)』と題したノートの記録による。塚田氏の映画鑑賞記録は、『東京中心トシタ内外映画封切一覧 ― 昭和21年以降　24年迄 ―』と題したノートが別にあるが、この『昭和20年以後見た映画』は、それを新たに清書し直したものである。「MARUGO」製のいわゆる横書きの大学ノートに青の万年筆で記されたもので、上記の表題はその第1頁(表紙ではない)に書かれ、題名と別に「昭和29年3月21日」とある。清書された記録は、昭和20(1945)年1月1日に始まり、昭和31(1956)年5月までのおよそ10年間に及ぶもので、従って昭和29(1954)年3月21日以降は、清書ではなく、鑑賞のつど記入したものとも思われる。塚田氏自身の書き込みによる鑑賞本数の総数は「1623本」である。ノートの第2頁には月ごとの鑑賞本数、鑑賞回数の一覧表を作成、記載していて、この表では昭和30年7月までの集計で終っている。回数を記載しているのは2本立て等の鑑賞を正確に記録するためであろう。以下、この年譜には清書された記録から、鑑賞日、鑑賞映画の題名、映画館名をノートの記述のまま転記する。映画題名、映画館名は、略記や誤記の場合があることも考えられ、また旧字、略字等の使用の場合に就いても、記述を可能な範囲で尊重してそのままを転記する。また、監督名、出演者名等の補記、更には考証が必要と思われるものも現状では後日に譲る。昭和20年という1年に限っては、一映画青年の敗戦の年の鑑賞記録としても貴重であることは言うまでもない。いずれにしても、塚田氏はこの時期の集中的な鑑賞体験から、映画公開に対しての正確な記録をとどめて(記録して)おくことの必要を感じたのであろうと推測する。記録の必要に迫られた、と言ってもいいかも知れない。いうなれば「塚田史学」の原点、出発点の、それは記録という評価をすべきノートと考える。また、当然乍らそれ以前、以後の鑑賞がある筈だが、それらが記録として残るかはまだ調査が及ばない。余談だが、塚田氏が一番好きな国の映画は「アメリカ映画」であったが、それはこの世代に共通することでもあるが、敗戦後に、そして占領下に集中して見ることの出来た外国作品が「アメリカ映画」

だったから、である。これも当然のことだが、戦時下の反動、でもあろう。

- 1月 3日（水）:「右門捕物帖　護る影」を「大福座」で見る。
- 1月 5日（金）:「歌う狸御殿」を「大福座」で見る。
- 1月 7日（日）:「野戦軍楽隊」を「仙台文化」で見る。
- 1月14日（日）:「柳生月影抄」を「大福座」で見る。
- 1月21日（日）:「音楽大進軍」を「福島東宝」で見る。
- 1月28日（日）:「望楼の決死隊」を「福島東宝」で見る。
- 2月 4日（日）:「二刀流開眼」を「福島東宝」で見る。
- 2月11日（日）:「母子草」を「福島大映」で見る。
- 2月25日（日）:「姿三四郎」を「福島東宝」で見る。
- 3月 4日（日）:「暖き風」を「福島東宝」で見る。
- 3月10日（土）: 午前1時半頃、大空襲により湯島の自宅が土蔵と共に全焼する（「私の一生」）。
- 3月18日（日）:「雷撃隊出動」、「陸軍」を「福島大映」で見る。
- 3月25日（日）:「宮本武蔵」を「福島大映」、「狼火は上海に揚る」を「福島東宝」で見る。
- 3月28日（水）:「磯川兵助功名噺」を「飯坂旭座」で見る。
- 4月 1日（日）:「狼火は上海に揚る」を「福島松竹」で見る。
- 4月15日（日）:「天晴れ一心太助」を「福島東宝」で、「龍の岬」を「福島松竹」で見る。
- 5月19日（土）:「大いなる翼」を「釜□国民学校」で見る（※校名1字不詳）。
- 6月10日（日）:「間諜　海の薔薇」を「福島松竹」で、「必勝歌」を「福島東宝」で見る。
- 6月17日（日）:「後に続くを信ず」を「福島東宝」で見る。
- 6月24日（日）:「陸軍特別攻撃隊」、「上の空博士（漫画）」を「福島東宝」で見る。
- 7月 1日（日）:「突貫駅長」を「福島東宝」、「撃滅の歌」を「福島日活」で見る。
- 7月 2日（月）:「海ゆかば」を「飯坂旭座」で見る。
- 7月 8日（日）:「撃滅の歌」を「福島東宝」で見る。
- 7月15日（日）:「紅顔鼓笛隊」を「福島松竹」で見る。
- 7月22日（日）:「桃太郎の海の神兵」を「福島松竹」で見る。
- 7月27日（金）:「続姿三四郎」を「福島松竹」で見る。
- 7月29日（日）:「乙女のいる基地」を「福島東宝」で見る。
- 8月 5日（日）:「続姿三四郎」を「福島東宝」で見る。
- 8月12日（日）:「日本剣豪傳」を「福島日活」で見る。
- 8月26日（日）:「秘めたる覚悟」を「福島松竹」で、「生きている孫六」を「福島東宝」で見る。
- 9月 9日（日）:「美しい横顔」を「福島松竹」で見る。
- 9月10日（月）:「浪人吹雪」を「福島東宝」で見る。
- 9月18日（火）:「兄弟会議」を「福島東宝」で見る。
- 9月23日（日）:「通し矢物語」を「福島日活」、「ことぶき座」を「福島東宝」で見る。
- 10月 8日（月）:「東海水滸傳」を「福島東宝」で見る。
- 10月 9日（火）:「アメリカ映画二本（題名不詳）」を「米進駐軍宿舎」で見る。
- 11月10日（土）:「赤西蛎太」を「福島東宝」で見る。
- 11月13日（火）:「海賊キッド」を「米進駐軍」（※9日の「宿舎」と同一か）で見る。
- 11月17日（土）:「愛の暴風」を「福島東宝」で見る。
- 11月25日（日）:「無法松の一生」を「福島東宝」で見る。

・11月28日（水）:「無法松の一生」を「福島東宝」で見る。
・12月　1日（土）:「伊豆の娘たち」を「福島東宝」で見る。
・12月　8日（土）:「天国の花嫁」を「福島松竹」で見る。
・12月12日（水）:「ユーコンの叫び」を「日比谷映画」で、「花咲く港」を「東京宝塚四階」で見る。
・12月13日（木）:「愛染かつら　前篇」を「電氣館」で見る。
・12月15日（土）:「限りなき前進」を「白木劇場」で見る。
・12月29日（土）:「愛染かつら（后篇）」を「福島日活」で見る。
・12月　　日（　）: 飯坂温泉千人風呂通りの二階の借間（4帖半と6帖の二間）で、家族7人新年を迎える（「私の一生」）。
・　月　　日（　）: 福島県立福島中学校、第三学年（※校名記載の無い）「成績表」あり。「中一組四十番」。

◇昭和21（1946）年：17歳

・1月　3日（水）:「グランドショウ1946年」を「渋谷松竹」で見る。
・1月　4日（金）:「狐の呉れた赤ん坊」を「根津東宝」で、「東京五人男」を「上野日活」で見る。
・1月　5日（土）:「千日前附近」を「東横デパート」で見る。
・1月19日（土）:「喜劇は終りぬ」を「福島松竹」で見る。
・1月26日（土）:「花嫁の寝言」を「福島松竹」で、「幾山河」を「福島東宝」で見る。
・2月　2日（土）:「ニコニコ大会　追ひつ追はれつ」、「歌の花籠」を「福島松竹」で見る。
・2月　9日（土）:「花籠の歌」を「福島松竹」で、「瓢箪から出た駒」を「福島日活」で見る。
・2月10日（日）:「桧舞台」を「福島東宝」で見る。
・2月16日（土）:「彼女の発言」を「福島松竹」で、「明治の兄弟」を「福島東宝」で見る。
・2月23日（土）:「煉火女工」を「福島松竹」で、「金毘羅船」を「福島日活」で見る（※　「煉火」は「煉瓦」の誤記）。
・3月　2日（土）:「大曽根家の朝」を「福島日活」で、「待っていた男」を「福島東宝」で見る。
・3月　9日（土）:「ウエア殺人事件」を「福島東宝」で、「粋な風来坊」を「福島松竹」で見る。
・3月15日（金）:「女生徒と教師」を「福島松竹」で、「鉄腕ターザン」を「福島東宝」で見る。
・3月23日（土）:「陽気な女」を「福島東宝」で見る。
・3月24日（日）:「街の人氣者」を「福島日活」で、「陽気な連中」を「福島松竹」で見る。
・3月30日（土）:「若い人」を「福島東宝」で、「新道（前篇）」を「福島松竹」で、「ツンドラ」を「福島日活」で見る。
・4月　7日（日）:「殴られたお殿様」を「福島日活」で、「緑の故郷」を「福島東宝」で、「花は偽らず」を「福島松竹」で見る。
・4月13日（土）:「百万両の壺」を「福島日活」で見る。
・4月14日（日）:「新道（后篇）」を「福島松竹」で見る。
・4月20日（土）:「火の夜」を「福島日活」で、「恋はやさし」、「花婿騒動記」、「笑う宝船」を「福島松竹」で見る。
・4月21日（日）:「キューリー夫人」を「福島東宝」で見る。
・4月27日（土）:「ヨシワラ」を「福島東宝」で、「誰か故郷を想はざる」を「大福座」で見る。
・4月28日（日）:「女性の勝利」を「福島松竹」で、「元禄女大名」を「福島日活」で見る。
・5月　4日（土）:「彼と彼女は行く」を「福島日活」で、「浦島太郎の後裔」を「福島東宝」で見る。

- 5月 5日（日）:「純情二重奏」を「福島松竹」で見る。
- 5月11日（土）:「風雲のベンガル」を「福島東宝」で、「扉を開く女」を「福島日活」で見る。
- 5月12日（日）:「人妻椿（前篇）」を「福島松竹」で見る。
- 5月18日（土）:「春の序曲」を「福島東宝」で見る。
- 5月19日（日）:「家族会議」を「福島松竹」で、「黄金狂時代」を「福島日活」で見る。
- 5月25日（土）:「幸運の仲間」を「福島東宝」で見る。
- 5月26日（日）:「人妻椿（后篇）」を「福島松竹」で見る。
- 6月 1日（土）:「民衆の敵」を「福島東宝」で、「はたちの青春」を「福島松竹」で見る。
- 6月 8日（土）:「拳銃の町」を「福島東宝」で、「或る夜の接吻」を「福島日活」で見る。
- 6月 9日（日）:「暖流　大会」を「福島松竹」で見る。
- 6月15日（土）:「巴里の屋根の下」を「福島松竹」で見る。
- 6月22日（土）:「麗人」を「福島東宝」で、「ラインの監視」を「福島日活」で見る。
- 6月23日（日）:「待ちぼうけの女」を「福島松竹」で見る。
- 6月29日（土）:「夜光る顔」を「福島日活」で見る。
- 6月30日（日）:「愛の先駆者」を「福島松竹」で見る。
- 7月 6日（土）:「禁断の家」を「福島東宝」で見る。
- 7月 7日（日）:「飛ぶ唄」を「福島日活」で見る。
- 7月13日（土）:「愛怨峡」を「福島日活」で、「お夏清十郎」を「福島松竹」で見る。
- 7月14日（日）:「良人の貞操」を「福島東宝」で見る。
- 7月20日（土）:「俺もお前も」を「福島東宝」で、「キングコブラ」を「福島日活」で見る。
- 7月25日（木）:「お夏清十郎」を「福島日活」で見る。
- 7月27日（土）:「望郷」を「福島東宝」で見る。
- 7月28日（日）:「人生画帖」を「福島松竹」で見る。
- 8月 1日（木）:「不良青年」を「福島松竹」で見る。
- 8月 4日（日）:「或る夜の殿様」を「福島東宝」で見る。
- 8月 7日（水）:「幽霊水芸師」を「福島日活」で見る。
- 8月 8日（木）:「人生とんぼ返り」を「福島東宝」で見る。
- 8月10日（土）:「絢爛たる復讐」を「福島日活」で見る。
- 8月15日（木）:「長脇差団十郎」を「福島日活」で、「鸚鵡は何を視たか」を「福島松竹」で見る。
- 8月18日（日）:「僕の父さん」を「福島東宝」で見る。
- 8月22日（木）:「男の償い（前篇）」を「福島松竹」で、「山吹猫」を「福島日活」で見る。
- 8月31日（土）:「命ある限り」を「福島東宝」で見る。
- 9月 1日（日）:「手袋を脱す男」を「福島日活」で、「女の幽霊」、「東京急行四列車」を「福島松竹」で見る。
- 9月 7日（土）:「乙女の湖」を「福島東宝」で、「雷雨」を「福島日活」で見る。
- 9月14日（土）:「ルパン登場」を「福島日活」で、「蛇姫様」を「福島東宝」で見る。
- 9月15日（日）:「男の償い（后篇）」を「福島松竹」で見る。
- 9月21日（土）:「浪華悲歌」を「福島松竹」で、「十一人の女学生」を「福島東宝」で見る。
- 9月22日（日）:「お嬢様お手を」を「福島日活」で見る。
- 9月28日（土）:「國定忠治」を「福島日活」で、「東京の女性」を「福島東宝」で見る。
- 9月29日（日）:「金ちゃんのマラソン選手」を「福島松竹」で見る。

・10月 5日（土）:「街の野獣」を「福島松竹」で、「祇園の姉妹」を「福島日活」で見る。
・10月 6日（日）:「母の曲」を「福島東宝」で見る。
・10月12日（土）:「浅草の灯」を「福島松竹」で、「霧の夜ばなし」を「福島東宝」で見る。
・10月13日（日）:「修道院の花嫁」を「福島日活」で見る。
・10月19日（土）:「シュバリエの流行児」を「福島東宝」で、「滝の白糸」を「福島日活」で見る。
・10月26日（土）:「ブロードウェイ」を「福島日活」で見る。
・10月27日（日）:「お光の縁談」を「福島松竹」で、「男の花道」を「福島東宝」で見る。
・11月 2日（土）:「パレットナイフの殺人」を「福島日活」、「嘆きの白薔薇」を「福島国際」で見る。
・11月 3日（日）:「父ありき」を「福島松竹」で見る。
・11月 9日（土）:「銀嶺セレナーデ」を「福島国際」で、「我が恋せし乙女」を「福島松竹」で見る。
・11月10日（日）:「おかぐら兄弟」を「福島日活」で見る。
・11月16日（土）:「春の調べ」を「福島東宝」で見る。
・11月17日（日）:「幽霊紐育を歩く」を「福島国際」で見る。
・11月21日（木）:「スポーツパレード」を「福島第四小學校」で見る。
・11月23日（土）:「カサブランカ」を「福島国際」で見る。
・11月24日（日）:「最后の地獄船」を「福島日活」で、「江戸ッ子三太」を「福島東宝」で見る。
・11月30日（土）:「我が青春に悔なし」を「福島東宝」で、「うたかたの恋」を「福島松竹」で見る。
・12月 1日（日）:「迷へる天使」を「福島国際」で見る。
・12月 7日（土）:「追憶」を「福島国際」で見る。
・12月 8日（日）:「うぐいす侍」を「福島東宝」で、「狸になった和尚さん」を「福島日活」で見る。
・12月10日（火）:「嫁ぐ日まで」を「飯坂小學校」で見る。
・12月14日（土）:「情熱の航路」を「福島国際」で、「格子なき牢獄」を「福島東宝」で見る。
・12月21日（土）:「暁に帰る」を「福島松竹」で見る。
・12月22日（日）:「呪いの家」を「福島日活」で、「淑女と拳骨」を「福島国際」で見る。
・12月24日（火）:「恋の十日間」を「福島日活」で見る。
・12月25日（水）:「此の虫十万弗」を「福島国際」で見る。
・12月27日（金）:「歌麿をめぐる五人の女」を「福島松竹」で見る。
・12月29日（日）:「二死万壘」を「福島東宝」で見る（※「万」は「満」の誤記と思われる）。
・12月31日（火）:「運命の饗宴」を「福島国際」で見る。
・　月　日（　）: 福島県立福島中学校、第四学年（※校名記載の無い）「成績表」あり。「4組44番」。
但し、この「成績表」には、「塚田嘉俊」とあり。

◇昭和22（1947）年：18歳

・ 1月 2日（木）:「スポイラース」を「南風座」で、「わが家の楽園」を「丸の内名画座」で見る。
・ 1月 3日（金）:「愛の宣言」を「築地映画」で、「天使の花園」を「オリオン座」で見る。
・ 1月 4日（土）:「我が心の歌」を大勝館で、「北海の子」を「浅草大都」で、「ロイドの武勇伝」を「東京倶楽部」で、「疑惑の影」を「大井映画座」で見る。
・ 1月 5日（日）:「雨ぞ降る」を「浦和劇場」で見る。
・ 1月 6日（月）:「南部の人」を「松坂シネマ」で見る。
・ 1月 7日（火）:「満月城の歌合戦」を「福島松竹」で見る。
・ 1月11日（土）:「盗まれかけた音楽祭」を「福島日活」で見る。

- 1月12日（日）:「旋風大尉」を「福島国際」で見る。
- 1月15日（水）:「桃色の旅行鞄」を「福島国際」で見る。
- 1月21日（火）:「七つの顔」を「福島東宝」で見る。
- 1月25日（土）:「最后の鉄腕」を「福島松竹」で見る。
- 1月29日（水）:「海の狼」を「福島日活」で見る。
- 1月30日（木）:「仮面の街」を「福島松竹」で見る。
- 1月31日（金）:「エノケンの法界坊」を「福島東宝」で見る。
- 2月 1日（土）:「海の狼」を「福島日活」で見る。
- 2月 4日（火）:「地獄の顔」「福島松竹」で、「聟入り豪華船」を「福島東宝」で見る。
- 2月15日（土）:「サンフランシスコ」を「福島日活」で見る。
- 2月19日（水）:「征服」を「大勝館」で、「断崖」を「浅草グランド」で、「夜は巴里で」を「浅草大都」で、「十万弗玉手箱」を「大井映画座」で、「響け凱歌」を「大井昭栄」で見る。
- 2月21日（金）:「象を喰った連中」を「福島松竹」で見る。
- 2月23日（日）:「花嫁の正体」を「福島日活」で、「アリゾナ」を「福島国際」で見る。
- 3月 1日（土）:「肉体と幻想」を「福島日活」で見る。
- 3月 3日（月）:「淑女は何を忘れたか」を「福島松竹」で見る。
- 3月 4日（火）:「王国の鍵」を「福島国際」で見る。
- 3月 5日（水）:「踊り子物語」を「福島日活」で、「忍術千一夜」を「福島松竹」で見る。
- 3月10日（月）:「小島の春」を「福島東宝」で見る。
- 3月11日（火）:「オペラハット」を「福島国際」で見る。
- 3月12日（水）:「春姿五人男」を「福島松竹」で見る。
- 3月18日（火）:「極楽闘牛士」を「福島日活」で見る。
- 3月21日（金）:「我が道を征く」を「福島国際」で、「応援団長の恋」を「福島松竹」で見る。
- 3月23日（日）:「四つの恋の物語」を「日比谷映画」で見る。
- 3月24日（月）:「永遠の處女」を「新宿松竹」で見る。
- 3月26日（水）:「クリスマスの休暇」を「オリオン座」で見る。
- 3月27日（木）:「大平原」を「上野日活」で、「嵐の青春」を「大勝館」で見る。
- 3月28日（金）:「にんじん」を「中央劇場」で見る。
- 3月31日（月）:「空の要塞」を「銀星座」で見る。
- 4月 4日（金）:「ルムバ」を「南風座」で見る。
- 4月 5日（土）:「夜霧の港」を「松坂シネマ」で見る。
- 4月 6日（日）:「人間エジソン」を「丸ノ内名画座」で見る。
- 4月 7日（月）:「薔薇屋敷の惨劇」を「銀座松竹」で、「結婚」を「日本館」で見る。
- 4月 8日（火）:「シーホーク」を「シネマロサ」で見る。
- 4月 9日（水）:「今ひとたびの」を「富士館」で、「エイヴリンカン」を「大井映画」で見る。（※「大井映画」は、この年の1月4日、2月19日にある「大井映画座」のことであろう。）
- 4月10日（木）:「青髭八人目の妻」を「オリオン座」で、「オペラハット」を「南風座」で見る。
- 4月29日（火）:「感激の町」を「福島日活」で見る。
- 4月30日（水）:「浅草の坊ちゃん」を「福島松竹」で見る。
- 5月 5日（月）:「元禄女大名」を「飯坂小學校」で見る。
- 5月 6日（火）:「天下の御意見番を意見する男」を「福島日活」で見る。

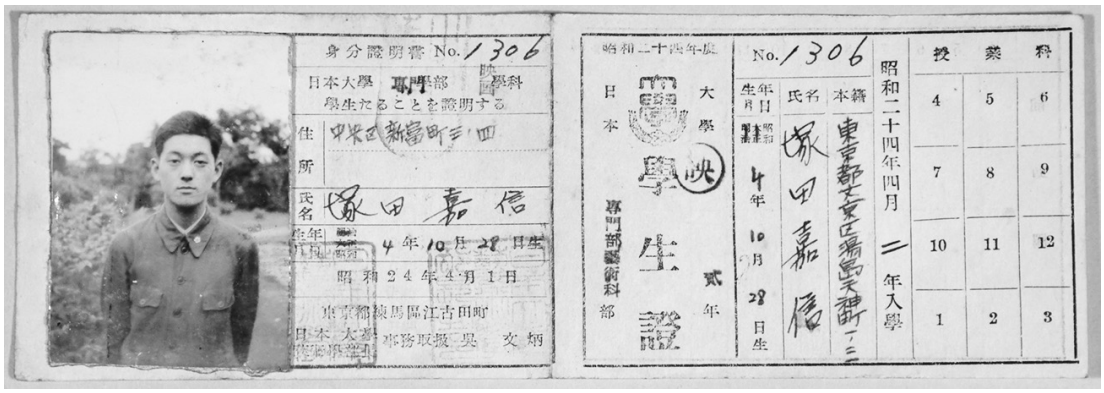
- 5月 8日(木):「小麦は緑」を「福島国際」で見る。
- 5月13日(火):「モロッコ」を「福島国際」で見る。
- 5月18日(日):「アメリカ交響楽」を「仙台中劇」で見る。
- 5月22日(木):「生きている死骸」を「福島国際」で見る。
- 5月27日(火):「長屋紳士録」を「福島松竹」で見る。
- 5月28日(水):「凹凸お化け騒動」を「福島日活」で見る。
- 5月31日(土):「大江戸の鬼」を「福島東宝」で見る。
- 6月 2日(月):焼失した湯島の家の跡地にバラックを完成させ、松司氏ひとりが先に戻る(「私の一生」)。
- 6月 6日(金):「花咲く家族」を「福島東宝」で見る。
- 6月10日(火):「竜虎伝」を「福島東宝」で見る。
- 6月17日(火):「謎の下宿人」を「福島日活」で見る。
- 6月21日(土):「銀盤の女王」を「福島国際」で見る。
- 6月26日(木):「バーレスクの王様」を「福島国際」で見る。
- 6月27日(金):「緑のそよ風」を「福島日活」で見る。
- 7月 1日(火):「ベニーの勲章」を「福島日活」で見る。
- 7月 5日(土):「晴れて今宵は」を「福島国際」で見る。
- 7月 9日(水):「直参風流男」を「飯坂小学校」で見る。
- 7月10日(木):「田之助紅」を「福島東宝」で見る。
- 7月12日(土):「嵐の青春」を「福島日活」で見る。
- 7月15日(火):「スキングホテル」を「福島日活」で見る。
- 7月22日(火):「四人の息子」を「福島国際」で見る。
- 7月24日(木):「青春の宿」を「南風座」で見る。
- 7月25日(金):「ターザンの逆襲」を「浅草ロキシー」で、「第七天国」を「グランド」で見る。
- 7月26日(土):「百万人の音楽」を「新宿セントラル」で見る。
- 7月27日(日):「我が道は遠けれど」を「上野日活」で見る。
- 7月28日(月):「かけ出し時代」を「浅草新劇」で見る。
- 7月29日(火):「戦争と平和」を「浅草新劇」で見る。
- 7月30日(水):「鉄腕ジム」を「上野日活」で見る。
- 7月31日(木):「恋愛手帖」を「グランド」で見る。
- 月 日( ):福島県立福島中学校、第五学年(昭和二十二年度)の「通知表」あり。「四組生徒」。この「通知表」には、「塚田嘉俊」とあり。また、「昭和二十二年四月検査」の「身體検査表」が記載され、「身長 158.4」、「体重 47.4」とあり。

◇昭和23(1948)年:19歳

- 4月 4日(日):家族全員が飯坂より引き上げ、湯島に戻る(「私の一生」)。

◇昭和24(1949)年:20歳

- 4月 1日(金):日本大学専門部映画学科の「昭和二十四年度学生証」に、「昭和二十四年四月二年入学」とあり、この年度に「二年」として入学か。「身分證明書 №1306」、「住所 中央区新富町三ノ四」と記載がある。



「日本大學専門部映画學科　學生證」

・ 4月12日（火）：この日付消印の、日本大学芸術科からの「文京区湯島天神町一の二一　塚田嘉信殿」宛ての「左記の通り成績を発表致します、」と記載する葉書があり、「科別映画科、成績・採点　B、順位　20、総人員　175、及・落判定　及」と成績が書き込まれている。これが「一年」の成績なのか、「入学試験」の成績なのか不詳の為、同大学への入学年度の断定が出来ない。後年、「日本大学専門部芸術科映画科中退」（『日本映画史の研究』の「奥付」頁収録の略歴）としているが、中退の時期も不詳。

◇昭和25（1950）年：21歳

◇昭和26（1951）年：22歳

◇昭和27（1952）年：23歳

・ 4月23日（水）：この日発行の「東洋大學短期大學部法文學科國語專攻」の「第二學年」、「學生證」あり。

・ 6月　1日（日）：田中純一郎氏がキネマ旬報社に入社する。

・ 7月15日（火）：この日発行の『キネマ旬報』に、読者投稿欄の「旬報サロン」開設される。因みに、塚田氏は『キネマ旬報』のことは「旬報」という略称を使用し、「キネ旬」という呼び方はしなかった。「我々の時代は旬報です」とお聞きしたことがある（※以下、「旬報サロン」と、「日本映画封切総目録」、「外国映画封切総目録」に関する項は佐崎順昭氏の調査による）。

◇昭和28（1953）年：24歳

・ 8月　1日（土）：**「絢爛期の作品リスト」**が、『キネマ旬報』№.69（97頁）の「旬報サロン」に掲載され、この欄への投稿が始まる。この欄の投稿仲間から発展して、やがて何人かの研究仲間が生れる。文中に「〝ある絢爛期〟の全作品リスト及びフウズ・フウを作りたいと手を出しはじめた私なども～」とあって、『キネマ旬報』への初登場も「全作品リスト」の話題からであった。

◇昭和29（1954）年：25歳

・ 2月 1日（月）：「セロハンは縮む」が、『キネマ旬報』№.83（157頁）の「旬報サロン」に掲載される。
・ 6月 1日（火）：「映画興行者に寄せる二、三／鉄条網のある映画館」が、『キネマ旬報』№.93（84頁）の「旬報サロン」に掲載される。
・ 7月 1日（木）：「再映作品の再記録」が、『キネマ旬報』№.95（133頁）の「旬報サロン」に掲載される。
・10月15日（金）：「「最後の億万長者」の行方」が、『キネマ旬報』№.102（84頁）の「旬報サロン」に掲載される。
・11月15日（月）：『キネマ旬報』№.104の「旬報サロン」に、岡田晋氏が「映画史研究会の提唱」と題した記事を発表する。「そろそろ日本にもまとまった映画史が出来てもよいのではないか」と考えたが、「それが歴史であるという以上、確乎とした資料の上に築かれたものでなければならないし、科学的なその分析と、事実を体系づける方法論がなければならない。」ものの「一人ではどうにもならないいらだちを感じ」ることになる。そこで、「有志を集め共同研究をしてはどうかと思い立った。しかし、映画を愛する人々は多いが、古い文献をしらべ、整理して行く地味な仕事に大半のエネルギーを消費しなければならぬ映画史の仕事を友とする人は、私の周囲にあまり少なかった。そうして共同研究の計画も、数ヵ月で立消え状態になってしまった。」が、「だが私はまだこの考えを放棄していない。」として、改めて研究会の設立を誌上で呼び掛けたのである。

◇昭和30（1955）年：26歳

・ 1月 1日（土）：「頭のない近松物語」が、『キネマ旬報』№.108（149頁）の「旬報サロン」に掲載される。
・ 3月15日（土）：「エビスのH映画館」が、『キネマ旬報』№.114（130頁）の「旬報サロン」に掲載される。因みに「H」映画館とは今日的な「H」、つまり成人映画やポルノ作品の意味ではなく「本庄映画館」の略である。
・ 7月 1日（金）：『映画史研究』創刊号（孔版印刷）発行。前年末に『キネマ旬報』の「旬報サロン」で岡田晋氏がその設立を呼び掛けた「日本映画史研究会」の会報。誌上に「会員名簿」が掲載されているので、以下、氏名のみを記す。田中純一郎、萩原光雄、赤羽駿、井沢光吉、一置夏洋、占部和彦、岡田晋、鬼頭麟兵、島田厚、菅井幸雄、塚田嘉信、中島智子、早川和延、吉田智恵男、の14名である。このメンバーが、所謂「同人」といった組織であったかは不詳。編集人・本文製版は一置夏洋、発行人は岡田晋、発行所は日本映画史研究会。この日本映画史研究会の住所は、新宿区の岡田晋の自宅住所である。因みに、塚田氏は、「プロダクション興亡史を」を執筆。
・ 9月 1日（木）：「日本映画封切総目録　昭和20年8月15日より昭和30年8月14日まで」を、「映画・戦後十年特集〔Ⅰ〕」として『キネマ旬報』№.127（69～130頁）に発表する。巻末の「編集室」（『キネマ旬報』の「編集後記」に当たるもの。本地注）で、「本誌の「旬報サロン」の常連塚田嘉信氏の丹念な調査を基礎にしたもの」と紹介する。但し、「目録」の冒頭箇所や目次に塚田氏の名の記載は無い。
・ 9月15日（木）：「外国映画封切総目録」を、「映画・戦後十年特集〔Ⅱ〕」として『キネマ旬報』№.128（93～140）に発表する。この号の「編集室」に「塚田」として参加しているので、2回に亙る「総目録」を契機として、この前後からキネマ旬報社の編集部に

出入りするようになったものと思われる。

・10月　1日（土）：「日本映画封切総目録」、「外国映画封切総目録」の索引に当たる**「内外映画作品題名総索引」**を、「映画・戦後十年特集〔Ⅲ〕」として『キネマ旬報』№.129（199～218頁）に発表する。

・11月　3日（木）：**『内外映画総目録　昭和20年8月15日～昭和30年8月14日』**を、『キネマ旬報・別冊』として発行。実質的には、この『別冊』が塚田氏の処女著作だが、著作者や編纂者としての塚田氏の名の記載は無い。この時期の『キネマ旬報』誌上の広告によれば、定価100円（送料とも）で、部数は5000部、「一般書店では取扱いません」とする。12月下旬号では、「再版出来」とあって、キネマ旬報社への直接申込みながら、初版は直ぐに完売したということか。

『内外映画総目録　昭和20年8月15日～昭和30年8月14日』。
表紙に「塚田蔵書」の印が押してある。

・12月20日（火）：『映画史研究』第2号発行。「文献資料目録一覧」の特集。過去に発行された映画文献全般に就いて、会員各氏の所蔵、上野図書館の所蔵を調査し、その書名、著者名、出版社を列記する。「上野図書館目録は塚田嘉信氏の調査による。」と紹介あり。「編集人・いちぎ夏洋、発行人・岡田晋、」表紙に「日本映画史研究会☆機関誌編集部☆発行」の記載あり。

◇昭和31（1956）年：27歳

・　1月　1日（日）：**「新・盛り場風土記　上野」**を、『キネマ旬報』№.136（191～194頁）に発表。カメラ（写真）は一置夏洋。『キネマ旬報』の「1月1日号」は前年末に発行されるので、塚田氏のキネマ旬報社の正式な就職も前年（昭和30年）末と推測する。但し、給与が1月からだとすると、前年中は見習い試用（?）期間だったのか。

・　1月　　日（　）：この月の分から、翌昭和32（1957）年1月分まで、株式会社キネマ旬報社の「給與明細票」あり。後年、「キネマ旬報社企画調査部」（『日本映画史の研究』の「奥付」頁収録の略歴）としていることを指すものと推測する。

・　7月18日（水）：キネマ旬報社より、「昭和三十一年夏季賞与」支給。支給の調書には「入社一年

未満につき金一封」の但し書きあり。支給額は「七千圓也」。

・12月25日（火）：湯島の自宅、戦災後の増築完成（「私の一生」）。

◇昭和32（1957）年：28歳

・ 4月20日（土）：田中純一郎著『日本映畫發達史　Ⅲ』（中央公論社）発行。この「Ⅲ」の巻末に「日本映畫發達史・全三巻」の「人名索引」、「作品（邦畫）索引」、「作品（洋畫）索引」が76頁にわたって収録されるが、この「索引の作成について、一置夏洋、塚田嘉信の両氏に、それぞれ多大の御世話になった」（「第三巻　あとがき」による）とある。

・ 8月25日（日）：土蔵の上に二階部分の増築完成（「私の一生」）。後、ここが塚田氏の書斎となったものと思われる。（即ち、私がいつも通される部屋であった）。

・10月15日（火）：京都の映画・演劇書専門店の古書店「西村書店」（京都市寺町通四條南入）より『日本映画書誌』（山口竹美著）を購入。購入金額は1000円（日付は書店の請求書による）。

・10月28日（月）：『映画資料　№1』（編集・発行　映画資料研究会）発行。発行所は「東京都文京区湯島天神町1の21　塚田方　映画資料研究会事務局」、同人は「井沢光吉　一置夏洋　神田浩靖　塚田嘉信　細谷勝雄　吉田智恵男」。『映画資料創刊号附録　映画資料シリーズ№1』として『1953・10 ～ 1957・10　銀座並木座上映作品総目録』細谷勝雄編（映画資料研究会・発行）が別冊で発行される（但し、この別冊の刊記は「1957 10」とのみ記載）。

・12月 3日（火）：『映画資料　№1』を、この日付で、国立国会図書館・受入整理部収集課に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。

◇昭和33（1958）年：29歳

・ 3月 1日（土）：『映画資料　№2』「尾上松之助特集」発行。同人に「浦野明」が加わる。「編集後記」に、「毎号五百部限定出版」とある。

・ 7月15日（火）：『映画資料　№3』発行。見出しには無いが、「編集後記」に「日活向島特集とした」とある。

・ 7月15日（火）：『映画資料通信　第一号』発行。発行所「東京都文京区湯島天神町一ノ二一　映画資料研究会」。同人や発行者の記載は無い。「昭和三十三年度上半期　日本映画監督別総目録」、「昭和三十三年度上半期　主要映画雑誌掲載　シナリオ一覧」を収録。

・12月15日（月）：『映画資料　第４号』発行。同人の記載が無くなり、「編集兼発行人　塚田嘉信」となる。「編集後記」に「本号では映画芸術協会をとりあげてみた。」とある。

◇昭和34（1959）年：30歳

・ 1月20日（火）：『映画資料通信』発行。「第二号」に当たるが本誌には号数記載漏れで、発行日による。「昭和三十三年度下半期」の「日本映画監督別総目録」と「シナリオ一覧」を収録。

・ 2月28日（土）：渋谷の古書即売展で、世田谷の「時代や書店」が出品した「映画雑誌　創刊号百十四種（大正期61冊、昭和期53冊）、五千円」を購入。創刊号コレクションの「柱」となる。この時の値札（たすき）は塚田氏コレクションに現存。私がお聞きしたこの時の購入は、即売展会場へ行ったものの、五千円と少ししか持ち合せ

が無かった為に、1度は買わずに帰り、しかし自宅近くまで戻って思い直し、再び買いに行った、との事であった。

- 3月15日（日）：『**映画資料　第５号**』「映画文献特集」発行。
- 3月24日（火）：この日発行の、「帝国秘密探偵社　別館」の手書きによる「身分証明書」あり。「別館」所在地は「東京都澁谷區千駄ヶ谷四ノ二〇」。
- 3月26日（木）：この日発行の、「帝国秘密探偵社」の「身分證明書」あり。社の所在地は「東京都中央区銀座二丁目二番地」で、「所屬身分　編集部」とあり。この社のものと推測する「諸給与明細表」が、「9月」から「昭和35年3月分」まであり。
- 7月20日（月）：『**映画資料通信　第三号**』発行。発行所が「塚田方　映画資料研究会」となる。「昭和三十四年度上半期」の「日本劇映画監督別総目録」（「日本映画」から「日本劇映画」と変わる）と「シナリオ一覧」を収録。

◇昭和35（1960）年：31歳

- 1月15日（金）：『**映画資料通信　第四号**』発行。「昭和三十四年度下半期」の「日本劇映画監督別総目録」と「シナリオ一覧」を収録。「掲示板」として、『興行ヘラルド』以下35種の映画雑誌タイトルを記載し、それらの書誌情報の提供、同時に譲渡を呼び掛けている。
- 11月　1日（火）：『**映画資料通信　第五号**』発行。「昭和三十五年度上半期」の「日本劇映画監督別総目録」と「シナリオ一覧」を収録。

◇昭和36（1961）年：32歳

- 7月11日（火）：北海道旭川の増野久喜氏より、父の蔵書『キネマ旬報』13号から550号（合本含む）までの揃いの売却の申し出がある（現存の書簡による。以下、増野氏とのやりとりは、書簡、その控、等の文書、書類による）。
- 7月　　日（　）：増野久喜氏より、『キネマ旬報』は「5万5千円以下では売れない」、との申し出あり。

◇昭和37（1962）年：33歳

- 1月29日（月）：増野久喜氏より、『キネマ旬報』を「4万円で売却」、と申し出あり。「5万5千円」提示後の二人の交渉の詳細は不明。本地が、塚田氏から直接聞いた話では、「1冊当たり、その当時の新刊の『キネマ旬報』の値段（定価）と同じで」という交渉だったという。
- 2月　1日（水）：戦前『キネマ旬報』の件、増野久喜氏宛てに「4万円で購入」と返事を送る。
- 2月　3日（土）：増野久喜氏より、『キネマ旬報』全冊を譲る返事が届く。
- 2月　6日（火）：増野久喜氏宛て、為替で4万円を送金する。
- 2月12日（月）：小樽の増野久義氏（久喜氏父か）が、『キネマ旬報』を、塚田嘉信氏宛てコンテナ便で発送する。
- 2月　　日（　）：この月より、昭和39（1964）年5月分まで、松竹株式会社の「給料明細表」が、毎月残る。『松竹七十年史』の編纂（主に、同書「資料篇」の演劇演芸興行記録、映画作品記録、洋画輸入興行記録、等の調査編纂）の為の勤務が始まる。2月分から6月分までは、23900円。7月分から昭和38（1963）年8月分まで20700円、昭

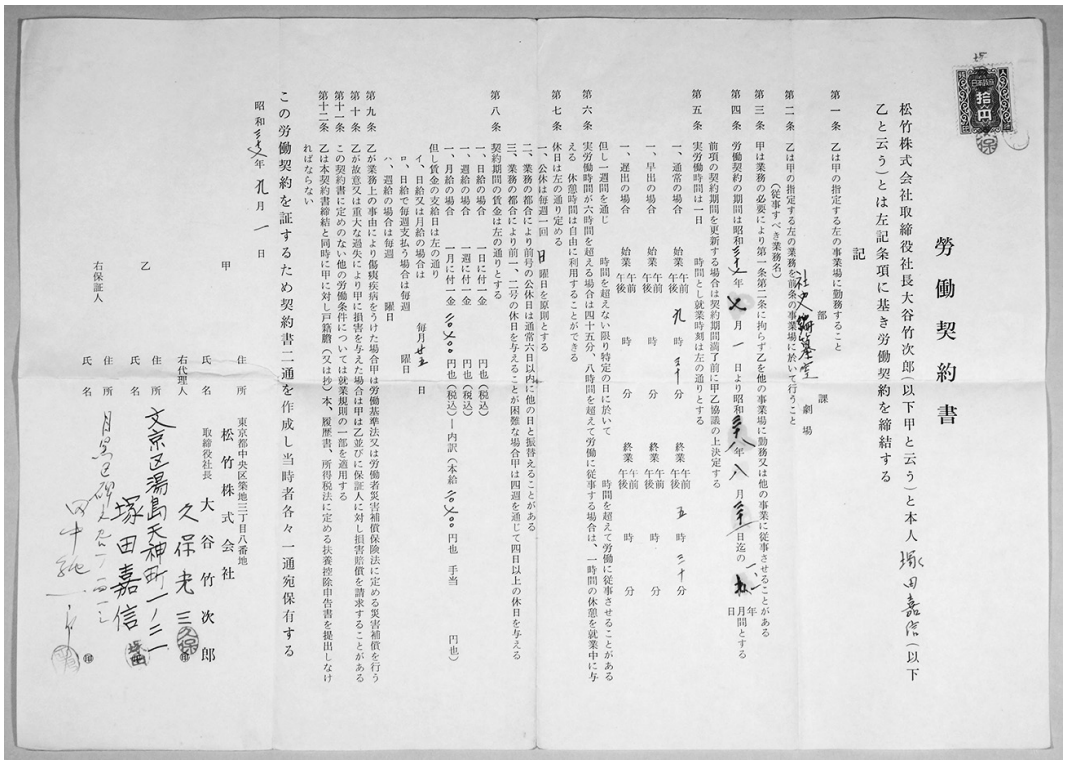
和38年（1963）9月分から昭和39（1964）年5月分まで24000円。因みに「松竹株式会社　社史編纂室　塚田嘉信」の名刺も残る。名刺による所在地は「東京都中央区築地三丁目八番地」。

・ 5月15日（火）：この日発行の『日本古書通信』第217号（11頁）の「探求書」欄に、「戦前のキネマ旬報　一 ～ 一二〇号、五五一 ～ 七三五号揃ったもの求む」を、「☆東京都文京区湯島天神町一の二　塚田嘉信」名義で掲載。増野氏から購入した分の欠号を求める記事と推測するが、増野氏のものは「13号～ 550号」の筈であり、この時点で「1 ～ 120号」の探求は意味不明である。いずれにしても、『松竹七十年史』編纂の為にも必要度が増したものと思われる。

・ 7月31日（火）：この日の消印による、京都の映画専門古書店である西村書店より、『映画旬報』全揃の買上、発送を連絡する葉書有り。送料サービスと添えられている。目録等による注文か、京都へ出向いての購入かは不詳。この年、戦前発行分の『キネマ旬報』、『映画旬報』を集中的に蒐集、購入していることが判る。

・ 8月　1日（水）：入江しげる、西山光燐、松田美知夫、御園京平の各氏編纂による『阪東妻三郎』（阪妻画譜刊行会刊）に、「協力」（奥付による）した35名のうちの一人として参加する。

・ 9月　1日（土）：「松竹株式会社取締役社長大谷竹次郎」を甲とし、「本人塚田嘉信」を乙とする「労働契約書」を締結。社史編纂室勤務を改めて正式に締結したものか。但し「昭和三十七年七月一日より昭和三十八年八月三十一日迄」とある。保証人は田中純一郎氏。



労働契約書

松竹株式会社取締役社長大谷竹次郎（以下甲と云う）と本人塚田嘉信（以下乙と云う）とは左記条項に基き労働契約を締結する

記

第一条　乙は甲の指定する左の事業場に勤務すること

第二条　乙は甲の指定する左の業務（甲の事業の業務場に於いて行うこと

第三条　甲は業務の必要により第一条第二条に拘らず乙を他の事業に勤務又は他の事業に従事させることがある

第四条　労働契約の期間は昭和三十七年　月　日より昭和三十八年　月　日迄の　年　月間とする

前項の契約期間を更新する場合は契約期間満了前に甲乙協議の上決定する

第五条　実労働時間は一日　時　分

時間とし就業時刻は左の通りとする

一、通常の場合　始業　午前　午後　時　分　終業　午前　午後　時　分

一、早出の場合　始業　午前　午後　時　分　終業　午前　午後　時　分

一、遅出の場合　始業　午前　午後　時　分　終業　午前　午後　時　分

但し一週間を通じ　時間を超えない限り特定の日に於いて

第六条　実労働時間が六時間を超える場合は四十五分、八時間を超えて労働に従事する場合は、一時間の休憩を就業中に与える　休憩時間は自由に利用することができる

第七条　休日は左の通り定める

一、公休は毎週一回　曜日を原則とする

二、業務の都合により前号の公休日は通常六日以内に他の日と振替えることがある

三、業務の都合により前一、二号の休日を与えることが困難な場合甲は四週を通じて四日以上の休日を与える

第八条　契約期間の賃金は左の通りとする

一、日給の場合　一日に付一金　円也（税込）

一、週給の場合　一週に付一金　円也（税込）

一、月給の場合　一月に付一金　円也（税込）一内訳（本給　円也　手当　円也）

但し賃金の支払日は左の通り

イ、日給又は月給の場合は　毎月　日

ロ、日給で毎週支払う場合は　毎週　曜日

ハ、週給の場合は毎週　曜日

第九条　乙が業務上の事由により傷痍疾病をうけた場合甲は労働基準法又は労働者災害補償保険法に定める災害補償を行う

第十条　乙が故意又は重大な過失により甲に損害を与えた場合は甲は乙並びに保証人に対し損害賠償を請求することがある

第十一条　この契約書に定めのない他の労働条件については就業規則の一部を適用する

第十二条　乙は本契約書締結と同時に甲に対し戸籍謄（又は抄）本、履歴書、所得税法に定める扶養控除申告書を提出しなければならない

この労働契約を証するため契約書二通を作成し当時者各々一通宛保有する

昭和三十七年　九月　一　日

甲　住所　東京都中央区築地三丁目八番地
氏名　松竹株式会社
取締役社長　大谷竹次郎
右代理人　久保光三

乙　住所　文京区湯島天神町一ノ二一
氏名　塚田嘉信

右保証人　住所
氏名

松竹との間で交わされた「労働契約書」。

・ 9月15日（土）：この日発行の『日本古書通信』第221号（19頁）の「探求書」欄に、「キネマ旬報（第六七〇号）昭和十四年二月一日写」を、「☆東京都文京区湯島天神町一の二十一 塚田嘉信」名義で掲載。「二月一日写」の「写」は、「号」等の他の字の誤植であろう。

・10月29日（月）：増野久義氏より、その後『キネマ旬報』の「551号から575号」の25冊の在庫有り、3000円で売却する、との来信が届く。

・11月 8日（木）：増野久義氏宛て、『キネマ旬報』25冊分の代金を書留で送金する。

・11月24日（土）：11月22日に小樽から日本通運による鉄道貨物便で発送された、増野久義氏からの荷の運賃460円を支払う。秋葉原着で発送されているが、鉄道便の受け取りは、駅が限定されていたかは未調査。

◇昭和38（1963）年：34歳

・ 5月 3日（金）：戦前の『キネマ旬報』誌上に連載された「日本映画史素稿」を補足する為に、活字化されなかった大森勝氏の調査・記録による明治42（1909）年後半から明治末（1911）年までの『都新聞』紙上の映画公開記録のノートを借用、この日の「午前三時三十五分写了」する。筆記には青インクの万年筆を使用し、筆写したノートは113頁にも及ぶ。誌面に活字化された本来の連載と、筆写したノートを一緒に綴じて自家用の合冊版に仕立てる。「写了」後に、『「日本映画史素稿」について』と題して、以下の記録を「あとがき」代りに記す（改行は省略）。「この素稿はキネマ旬報誌上に昭和十年九月一日号から昭和十四年六月二十一日号まで六十六回にわたって継続的に連載されたもので、明治二十九年映画の輸入から始って明治四十二年半ばに至る映画の発達を綿密に調査した文字通り映画史研究の素稿である。残念ながら単行本にならず、又明治期を了へることなく中絶したのは惜しまれるが、幸い編者の一人大森勝氏未だ健在であり四十二年後半から明治末年に至るまでの調査原稿を保管されていることを知り、拝借してノートさせてもらった。ペン書きの部分がそれである。かくて一応、明治期の東京方面の資料が揃ったことになる。現在では旬報誌上のものを集めることすら不可能に近いが、未掲載の原稿をも併せ蒐集出来たことは大きな喜びである。この資料集成は天下に一つしかない貴重なものである。私の死後は誰の手に渡るかわからない。しかしこの文化的遺産は朽ちることなく、眞に映画を愛する人の手から手に、末代までも受けつがれんことを祈るや切である。　昭和三十八年五月三日　塚田嘉信」。

◇昭和39（1964）年：35歳

・ 3月20日（金）：『**松竹七十年史**』発行（日付は奥付による）。田中純一郎氏の「あとがき」に、「資料の収集調査は塚田嘉信君を主として」と記載する。

・ 4月 1日（水）：『**映画どうらく　№1**』発行。奥付記載無し。最終頁下段に「まえがきとあとがきと」という欄があり、その冒頭に「今月から二人で〝どうらく〟に本誌を発刊することにした。」とあり、また文末に「本誌についてのお便りは左記のいずれかにお願いします。」として塚田嘉信氏と細谷勝雄氏の住所と名前を記載する。タイトルの下に「百部限定、無料頒布」とあり。本文は「昭和三十八年度　日本映

画監督別目録」を収録。

・ 4月30日（木）:『松竹七十年史』が、大日本印刷株式会社榎町工場から松竹本社への第1回納品。皮装4部、並装97部。

・ 5月 1日（金）:『映画どうらく　No.2』発行。「映画資料研究会リポート（1）　荒居商会についての疑問」、「活動写真を主とした私の自叙伝　柴田勝」等を収録。

・ 5月30日（土）: この日付で松竹株式会社を退職。以後、塚田氏は会社等へ就職することは無かった（若いときの結核から、体力的にも困難だったか?）ものと思われ、映画史研究と資料蒐集に専念する。

・ 6月 1日（月）:『映画どうらく　No.3』発行。「映画資料研究会リポート（2）　映画史に対する態度について」、「明治時代の説明振り　水野一二三」、「活動写真を主とした私の自叙伝（2）　柴田勝」等を収録。

・ 6月 5日（金）:「〈松竹七十年史〉資料収集にあたって」を、社報『松竹』（松竹株式会社調査室刊）№170（5頁）に発表。因みに4頁には田中純一郎氏の「『松竹七十年史』余禄」。

・ 7月10日（金）:『映画どうらく　No.4』発行。奥付が新たに記載され、「〈編集・印刷／発行〉東京都江東区深川千田町15　細谷勝雄方　「映画どうらく」編集室」とある。「映画資料研究会リポート（3）　活動写真東京公開についての一資料」、「日本映画の百人　池永浩久　吉田智恵男」、「活動写真を主とした私の自叙伝（3）　柴田勝」等を収録。

・ 9月10日（木）:『映画どうらく　No.5』発行。「水野一二三氏の死を悼む」として、柴田勝、梅村紫声、御園京平、細谷勝雄、塚田嘉信の各氏の追悼文、「日本映画の百人　水野一二三　吉田智恵男」、また「活動写真を主とした私の自叙伝（4）　柴田勝」、「同（5）」等を収録。

・10月 5日（月）:『映画どうらく　No.6』発行。「キネトスコープへの一考察　梅村紫声」、「昭和初期の台北映画界　海野幸一」、「活動写真を主とした私の自叙伝（6）　柴田勝」、「続日本映画書誌（一）　（塚田）」等を収録。

・12月 1日（火）:『映画どうらく　終刊号』発行。奥付等、発行所、発行者の記載は無い。「映画資料研究会リポート（4）　中島敬一とその仲間たち　（吉田智恵男）」、「昭和初期の台北映画界（その二）　海野幸一」、「活動写真を主とした私の自叙伝（7）　柴田勝」等を収録。

◇昭和40（1965）年：36歳

・ 1月 7日（木）: この日の橘弘一郎氏の「日記」に、「塚田君と田中氏訪問」の記載有り。映画世界社の橘弘一郎氏の日記は、1965（昭和40）年と翌1966（同41）年の2冊が遺されている。この日記も含めて、橘氏没後に、橘氏の許に遺されていた資料類の一部が塚田氏に譲られた（託された）と推測する。現状では、橘氏旧蔵資料はダンボール箱で数箱の量と思われるが、主に橘氏宛て（映画世界社宛て）書簡、名刺類と谷崎潤一郎関係資料である。他にも『蒲田』や『映画ファン』等の映画雑誌、スチール写真類にも橘氏（映画世界社）旧蔵が少なくない量で含まれると思われるが、詳細は未調査。この日記は竹尾洋紙店製の日記帳で、上記の2冊のみが遺されている。この中より、塚田氏の名が出てくる部分のみ（同日の前後部分の記述も省略）を、以下の2年間にわたって橘氏の記述のまま「　」内に転記し、続

けて出典として（橘氏日記）と注記する。塚田氏と共に記載ある人名、事項等には不詳の部分もあるが、現時点では考証を一切加えない。この日を含め、日記に残る昭和41（1966）年12月30日まで、塚田氏の橘氏訪問は通算で177回に及ぶ。日記には記録漏れの可能性も否定出来ず、また、前後の日記があれば、更にその回数が増えたであろうことは容易に想像出来る。

- 1月21日（木）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 1月28日（木）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 1月29日（金）:「塚田君とムギにゆく、」（橘氏日記）。
- 2月　1日（月）:「塚田本整理　2,000―」（橘氏日記）。
- 2月　4日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 2月14日（日）:「塚田君来宅、移轉通知出す。」（橘氏日記）。
- 2月23日（火）:「塚田君とめし、校正依頼」（橘氏日記）。
- 2月26日（金）:「塚田君来宅校正たのむ、」（橘氏日記）。
- 3月11日（木）:「塚田君」（橘氏日記）。
- 3月17日（水）:「塚田君校正依頼」（橘氏日記）。
- 3月18日（木）:「塚田君来宅校了、」（橘氏日記）。
- 3月20日（土）:「塚田山本早田伊藤と支那を食べる、」（橘氏日記）。
- 3月29日（月）:「塚田君来る、校正たのむ」（橘氏日記）。
- 3月30日（火）:「塚田君校正持参、」（橘氏日記）。
- 4月　2日（金）:「朝日芝浦工場見学　塚田君と一緒」（橘氏日記）。
- 4月　6日（火）:「塚田来宅、移転ハガキたのむ、」（橘氏日記）。
- 4月　8日（木）:「塚田、山本、原田、日の　加福」（橘氏日記）。
- 4月17日（土）:「塚田君物置の雑誌整頓」（橘氏日記）。
- 4月21日（水）:「雨、塚田君来宅」（橘氏日記）。
- 4月27日（火）:「塚田来宅」（橘氏日記）。
- 5月14日（金）:「塚田君来宅、山本と3人でスエヒロで食事、」（橘氏日記）。
- 5月26日（水）:「塚田君来宅第二巻見本見せる、」（橘氏日記）。
- 6月　3日（木）:「塚田、田中純来宅、第二巻発送する、」（橘氏日記）。
- 6月　4日（金）:『映画雑誌創刊号目録　大正篇』を、この日付で、国立国会図書館・収書部に納本する（国立国会図書館収書部よりの納本通知葉書による）。
- 6月　5日（土）:「塚田君と田中栄三氏訪問」（橘氏日記）。
- 6月　6日（日）:「塚田君と近藤氏宅訪問　本11冊借りる、」（橘氏日記）。
- 6月　6日（日）:『**映画雑誌創刊号目録　大正篇**』上梓。奥付に、「編著者兼発行者　東京都文京区湯島2丁目27番5号　塚田嘉信」、「本書は限定50部の内　第　番」とあり、限定番号は印刷とは別にスタンプ・インクで押された。
- 6月　8日（火）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 6月10日（木）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 6月11日（金）:「塚田君第三巻に着手」（橘氏日記）。
- 6月12日（土）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月18日（金）:「塚田君仕事つづける、」（橘氏日記）。
- 6月19日（土）:「塚田君仕事、」（橘氏日記）。

- 6月20日（日）:「塚田と近藤宅訪問、本借りる、」（橘氏日記）。
- 6月21日（月）:「塚田山形へ誘う。」（橘氏日記）。
- 6月22日（火）:「塚田、」（橘氏日記）。
- 7月 1日（木）:「午前山形へ塚田君と出発、上ノ山温泉、祝宴あり　つまらぬ所、」（橘氏日記）。
- 7月 5日（月）:「雨、塚田来宅」（橘氏日記）。
- 7月 7日（水）:「塚田君と田中栄三氏訪問」（橘氏日記）。
- 7月 9日（金）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 7月11日（日）:「山本、塚田と写真撮影する、」（橘氏日記）。
- 7月15日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 7月22日（木）:「塚田来宅、校正依頼、」（橘氏日記）。
- 7月31日（土）:「塚田校正持参（初校棒ぐみ）」（橘氏日記）。
- 8月 2日（月）:「塚田君来る、」（橘氏日記）。
- 8月 4日（水）:「塚田君と田中栄三氏を訪問する、」（橘氏日記）。
- 8月 6日（金）:『キネマ旬報』創始者の田中三郎氏が、この日午前3時、伊勢市の市民病院で心筋梗塞により急逝、享年66。6日の正午、旧旬報の同人等でつくる「田中会」の岡部龍氏宛てに夫人から電報で知らせが届き、岡部氏は9日付けで「田中会」の会員（?）に知らせたものと思われる。岡部氏より橘弘一郎氏宛ての葉書が残る。
- 8月 8日（日）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 8月13日（金）:「塚田君来宅雑誌数部かりる、」（橘氏日記）。
- 8月28日（土）:「塚田吉田来宅よしはしへ食事にゆく、」（橘氏日記）。
- 9月 3日（金）:「塚田来宅種々依頼する、」（橘氏日記）。
- 9月 6日（月）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 9月 9日（木）: 午後2時より四谷の愛染院に於いて、田中三郎氏の「友人葬」が行われる。友人総代・田村幸彦氏。（橘弘一郎氏宛て葉書による）。
- 9月19日（日）:「塚田君に校正依頼する、」（橘氏日記）。
- 10月 5日（火）:「午后写真撮影　塚田君に手傳ってもらう、」（橘氏日記）。
- 10月 9日（土）:「塚田君来宅する、」（橘氏日記）。
- 10月10日（日）:『映画雑誌創刊号目録　昭和篇』上梓。奥付に、「編著者兼発行者　東京都文京区湯島2丁目27番5号　塚田嘉信」とあり。奥付欄とは別に、最終頁に「本書は限定44部の内　第　番」、献呈先として「　　様宛献呈本」の文字が印刷されている。限定番号はスタンプ・インクで押され、献呈宛名は塚田氏自筆で書き込まれた。吉田智恵男氏の寄稿「『映画雑誌創刊号目録』によせて」を巻末に収録する。
- 10月16日（土）:「塚田君来宅、校正など依頼、田中栄三氏を二人で見舞う、」（橘氏日記）。
- 10月19日（火）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 10月23日（土）:「塚田君に校正依頼する、」（橘氏日記）。
- 10月25日（月）:「塚田校正持参、」（橘氏日記）。
- 10月28日（木）:「塚田、堀田計理士来宅」（橘氏日記）。
- 11月 1日（月）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 11月 1日（月）:『映画雑誌創刊号目録　昭和篇』を、この日付で、国立国会図書館・収書部に納本する（国立国会図書館収書部よりの納本通知葉書による）。
- 11月 3日（水）:「塚田来宅」（橘氏日記）。

・11月 8日(月):「塚田、岡部来宅」(橘氏日記)。
・11月11日(木):「塚田藤田来宅、」(橘氏日記)。
・11月13日(土):「塚田、山本とやき肉食う。」(橘氏日記)。
・11月18日(木):「塚田君来宅」(橘氏日記)。
・11月20日(土):「塚田君原稿持参、」(橘氏日記)。
・11月25日(木):「塚田君新青年創刊号」(橘氏日記)。
・11月28日(日):「塚田君と近藤氏訪問本全部返却する、」(橘氏日記)。
・11月30日(火):「塚田、吉田君と来宅」(橘氏日記)。
・12月 1日(水):「笹田葬ギ、ゆきに塚田宅、校正依頼する、」(橘氏日記)。
・12月 3日(金):「塚田君来宅、田中三郎校了にする、」(橘氏日記)。
・12月 7日(火):「塚田君来宅 田中三郎校了にする、」(橘氏日記)。
・12月10日(金):「塚田来宅」(橘氏日記)。
・12月11日(土):「塚田君と田中栄三氏見舞う」(橘氏日記)。
・12月16日(木):「藤田、岡部、塚田来宅、田中発送 一緒にトンカツ」(橘氏日記)。
・12月17日(金):「入札展へ塚田とゆく、」(橘氏日記)。
・12月18日(土):「塚田、岡部来宅、発送する、」(橘氏日記)。
・12月19日(日):「塚田君リスト持参」(橘氏日記)。
・12月24日(金):「塚田来宅」(橘氏日記)。
・12月29日(水):「塚田君へ 5,000— 2,000—」(橘氏日記)。

◇昭和41(1966)年:37歳

・ 1月 5日(水):「塚田、小川博来宅」(橘氏日記)。
・ 1月 8日(土):「塚田と田中栄三氏訪問」(橘氏日記)。
・ 1月12日(水):「塚田君と辻留」(橘氏日記)。
・ 1月19日(水):「塚田山本と刺青を見る、」(橘氏日記)。
・ 1月24日(月):「塚田来宅校正依頼」(橘氏日記)。
・ 1月25日(火):「塚田校正持参」(橘氏日記)。
・ 1月28日(金):「塚田来宅、」(橘氏日記)。
・ 2月 1日(火):「塚田藤田来宅する、」(橘氏日記)。
・ 2月 6日(日):「塚田君来宅、」(橘氏日記)。
・ 2月10日(木):「塚田、御園京平氏と来る、」(橘氏日記)。
・ 2月11日(金):「塚田来宅、3巻校了を手傳ってもらう、」(橘氏日記)。
・ 2月20日(日):「塚田君来宅、」(橘氏日記)。
・ 2月23日(水):「田中純、小高、塚田来宅」(橘氏日記)。
・ 2月26日(土):「塚田、御園と来訪いろいろ借りる、」(橘氏日記)。
・ 3月 1日(火):「塚田、永富来宅」(橘氏日記)。
・ 3月 3日(木):「永とみ来訪 塚田〃」(橘氏日記)。
・ 3月 7日(月):「塚田君に来てもらい校了にする、碩君に渡す、」(橘氏日記)。
・ 3月11日(金):「塚田来宅、」(橘氏日記)。
・ 3月13日(日):「塚田君と田中栄三氏訪問」(橘氏日記)。
・ 3月17日(木):「塚田来宅、」(橘氏日記)。

- 3月22日（火）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 3月26日（土）:「塚田君にいろいろ依頼　塚田7,000」（橘氏日記）。
- 3月31日（木）:「岡部、塚田来宅、天国でめし、」（橘氏日記）。
- 4月 2日（土）:「塚田来宅、吾八へゆく田中著書2部預ける、」（橘氏日記）。
- 4月 3日（日）:「午后、塚田、吉田来宅、夕食一緒にする、」（橘氏日記）。
- 4月 6日（水）:「塚田、」（橘氏日記）。
- 4月10日（日）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 4月11日（月）:「午后セイロカ、淀川君と帰宅、塚田と3人でめし、」（橘氏日記）。
- 4月16日（土）:「塚田、御その両君来宅」（橘氏日記）。
- 4月17日（日）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 4月21日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 4月26日（火）:「塚田君と田中純一郎を見舞う。」（橘氏日記）。
- 4月29日（日）:「夜淀川と塚田とめし」（橘氏日記）。
- 5月 1日（日）:「川崎さいかやデパートへゆく　塚田君同行」（橘氏日記）。
- 5月 3日（火）:「塚田君来宅、」（橘氏日記）。
- 5月 5日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 5月12日（木）:「塚田来宅　塚田君7,000」（橘氏日記）。
- 5月15日（日）:「塚田御その来宅。」（橘氏日記）。
- 5月19日（木）:「塚田。庄司浅水、笹田博夫来宅す。」（橘氏日記）。
- 5月21日（土）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 5月24日（火）:「塚田、東洋インキ、精興社君来宅」（橘氏日記）。
- 6月 1日（水）: 御園京平氏編刊『映画渡来七十年　あゝ活動大写真　映画説明者年代記』に、梅村紫声氏と共に「協力」（奥付の表記による）する。
- 6月 2日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月 8日（水）:「塚田、淀川来宅する、」（橘氏日記）。
- 6月 9日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月11日（土）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月19日（日）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月21日（火）:「塚田来宅スライド依頼する、」（橘氏日記）。
- 6月23日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月24日（金）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 6月27日（月）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 7月 6日（水）:「塚田、写真やさんと来訪、ワンセット出来る、未払い。」（橘氏日記）。
- 7月 9日（土）:「塚田君宅、」（橘氏日記）。
- 7月12日（火）:「塚田来宅　明日より京都へ行く由。」（橘氏日記）。
- 7月18日（月）:「塚田君京都より帰り来宅、荷風を依頼する、」（橘氏日記）。
- 7月21日（木）:「小高、塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 7月24日（日）:「塚田、御その来宅、」（橘氏日記）。
- 7月31日（日）:「塚田来宅校正依頼」（橘氏日記）。
- 8月 1日（月）:「塚田校正持参する。」（橘氏日記）。
- 8月 7日（日）:「塚田来宅」（橘氏日記）。

- 8月12日（金）:「塚田来宅東洋インキ任さる、」（橘氏日記）。
- 8月13日（土）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 8月16日（木）:「夜塚田、山本とやき肉。」（橘氏日記）。
- 8月21日（日）:「塚田来宅」（橘氏日記）。
- 8月23日（火）:「塚田来宅」（橘氏日記）。
- 8月24日（水）:「塚田、JMC藤田来宅」（橘氏日記）。
- 8月25日（木）:「塚田みその来宅」（橘氏日記）。
- 8月28日（日）:「小高、塚田仕事する、」（橘氏日記）。
- 8月31日（水）:「塚田、中野キヤメラ氏と来宅、」（橘氏日記）。
- 9月 2日（金）:「塚田来宅一緒に天国、 塚7,000」（橘氏日記）。
- 9月 7日（水）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 9月10日（土）:「ひる塚田山本と焼肉」（橘氏日記）。
- 9月12日（月）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 9月15日（木）:「塚田君と田中栄三氏訪問」（橘氏日記）。
- 9月20日（火）:「塚田君来宅」（橘氏日記）。
- 9月22日（木）:「塚田君来宅、全部校了にする、」（橘氏日記）。
- 9月28日（水）:「塚田来宅～天国天井、」（橘氏日記）。
- 10月 2日（日）:「塚田、大森来宅一緒にめし」（橘氏日記）。
- 10月 5日（水）:「中野キヤメラ主人、塚田来宅」（橘氏日記）。
- 10月10日（月）:「塚田来宅スライド 500, ―」（橘氏日記）。
- 10月15日（土）:「塚田来宅」（橘氏日記）。
- 10月21日（金）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 10月23日（日）:「塚田、エミ子3人で来る 3,000―」（橘氏日記）。
- 11月 1日（火）:「塚田手傳い」（橘氏日記）。
- 11月 4日（金）:「塚田へ 塚7,000」（橘氏日記）。
- 11月10日（木）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 11月12日（土）:「塚田来宅、」（橘氏日記）。
- 11月18日（金）:「塚田小高来宅、」（橘氏日記）。
- 11月25日（金）:「塚田と銀座、吾八へゆく ミスプリント発見」（橘氏日記）。
- 11月27日（日）:「塚田、御園、吉田来訪する、」（橘氏日記）。
- 12月 3日（土）:「塚田と八角亭」（橘氏日記）。
- 12月 5日（月）:「夜塚田来宅」（橘氏日記）。
- 12月10日（土）:「塚田来宅～田中栄三氏訪問止め」（橘氏日記）。
- 12月14日（水）: 御園京平氏編刊『映画渡来七十年 映画・忠臣蔵』に、柴田勝氏と共に「協力」（奥付の表記による）する。
- 12月15日（木）:「塚田手傳い」（橘氏日記）。
- 12月21日（水）:「塚田君来宅買ものアメヨコ頼む」（橘氏日記）。
- 12月24日（土）:「塚田へ 7,000」（橘氏日記）。
- 12月27日（火）:「塚田来宅」（橘氏日記）。
- 12月29日（木）:「山本、塚田と浅草へゆく、」（橘氏日記）。
- 12月30日（金）:「塚田来宅4,000入金預る、」（橘氏日記）。

・12月31日（土）:『**映画雑誌創刊号目録　補遺篇**』上梓。奥付に、「編著者兼発行者　東京都文京区湯島2丁目27番5号　塚田嘉信」、「本書は限定44部の内　第　番」とあり。限定番号は印刷とは別にスタンプ・インクで押された。『**大正篇**』、『**昭和篇**』、『**補遺篇**』の3冊を纏めて収める箱が別に作られた（箱の製作部数は不明）。後年、本地が古書店からこの3冊揃いを購入した際、塚田氏から「箱は付いていましたか？」と聞かれて箱があることを初めて知らされた。余談ながら、購入したものは箱は無かった。

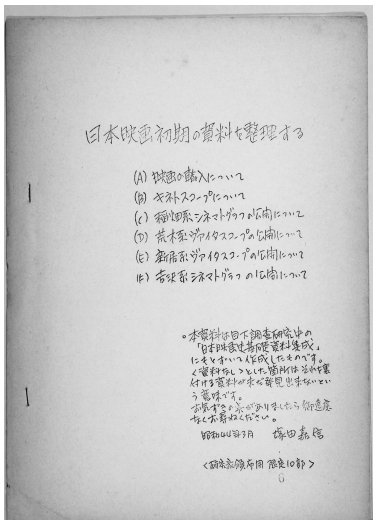
◇昭和42（1967）年：38歳

・ 1月13日（金）:『映画雑誌創刊号目録　補遺篇』を、この日付で、国立国会図書館・収書部に納本する（国立国会図書館収書部よりの納本通知葉書による）。
・ 6月29日（水）: 橘弘一郎氏、この日午前4時、肺癌のため築地の聖路加病院で死去、享年63。
・ 7月　3日（月）: 午後2時より、青山斎場にて橘弘一郎氏の告別式。
・11月　1日（水）: 御園京平氏編による『月形龍之介全作品総目録　龍之介抄』（活動資料研究会刊）に、鳥羽幸信、細谷勝雄の各氏と共に「調査と編集の協力」（「あとがき」の記載による）をする。

◇昭和43（1968）年：39歳

◇昭和44（1969）年：40歳

・ 3月　　日（　）:『**日本映画初期の資料を整理する**』発行。「〈研究家頒布用　限定10部〉」とあり。



『日本映画初期の資料を整理する』表紙。

Ｂ４のわら半紙4枚に孔版印刷したものを袋綴じしたもので、「本資料は目下調査研究中の『日本映画史基礎資料集成』にもとずいて作成したものです。」とある。10部が実際にどの「研究家」の範囲に配布されたかは不明。塚田氏コレクションには、「限定10部」と印刷された文字の下部に、「6」と「8」とナンバリングされた2部があり、それ以外の数字のものが配布された可能性がある。冒頭に整理項目として、「(A) 映画の輸入について、(B) キネトスコープについて、

(C) 稲畑系シネマトグラフの公開について、(D) 荒木系ヴァイタスコープの公開について、(E) 新居系ヴァイタスコープの公開について、(F) 吉沢系シネマトグラフの公開について」の6項目が挙げられているが、即ちこの課題が後に『日本映画史の研究』に結実することになる。

◇昭和45 (1970) 年：41歳

・ 1月 8日 (木) : 御園京平氏編による『みそのコレクション 〈明治 大正 昭和〉映画資料集大成』(活動資料研究会刊) に、鳥羽幸信、三好昌尚、御園京平の各氏と共に「編集委員」として参加する。

・ 9月 日 ( ) : それまでの日本映画史文献 (『日本映画発達史』) で記述されていた、我が国の映画初公開記事とされる『神戸又新日報』の明治29 (1896) 年11月19日付紙面の記事に就いて、塚田氏自身もその新聞の所在確認を心掛けていたが、この月、神戸市立図書館 (当時の住所表記は、神戸市生田区楠町7丁目2番地) に対し、探索する日付の同紙紙面が保存されているか、保存されている場合は複写をお願い出来るか、という問い合わせの手紙を投函する (投函した手紙の「下書き」が残る)。

・10月 日 ( ) :『神戸又新日報』の件で、神戸市立図書館に問い合わせた返事が館の奉仕係から、「当館に保存しております」との返事と共にコピー料金 (塚田氏、図書館双方共に「コピー」ではなく「ゼロックス」の用語を使用している。この時代、コピーを意味する「ゼロックス」という言葉が普通名詞として通用していた。) 等の返信が届く。日付は消印からの判断だがインクが薄れており、推測では「10月1日」と思われる。塚田氏は折返し、3日付の現金書留で、紙面6頁分、コピー18枚分の代金を郵送する (現金書留の発送控等による)。

・10月 6日 (火) : この日付で神戸市立図書館が『神戸又新日報』の紙面コピーを発送する (この日付の図書館の封筒による)。届いた明治29 (1896) 年11月19日付『神戸又新日報』紙面の確認により、『映画史料発掘』発行へと発展する。

・11月17日 (火) : 私家版雑誌『**映画史料発掘**』(**第1号**)、「小松宮殿下が活動写真を御覧になったのはいつか」(1 ～ 15頁) 発行。但し、表紙、奥付等に「第1号」の表記はない。発行日の「11月17日」は、その小松宮がキネトスコープを見た日である (塚田氏は当然乍らそれを意識して、この日の発行としたのであろう。) 奥付は「昭和四十五年十一月十七日発行 著者兼発行者 東京都文京区湯島2-27-5 塚田嘉信 非売品」と記載されている (以下の号の発行日は全て奥付による)。

・11月29日 (日) : この日付で発行された『映画史料発掘』(第1号) の印刷費領収証「28.000円」(東京都品川区上大崎一丁目四番十一号・㈲同心印刷) 有り。領収書に但し書き (「映画史料発掘」の誌名や号数) は無いが、「映画史料発掘製作費」と赤マジックで書かれた封筒 (岩波書店の「図書」の塚田氏宛て郵送の封筒。以下、『映画史料発掘』の印刷費の見積書、領収書等は、全てこの岩波書店の封筒に纏めて保存されていたもの。これらの書類が、納品される『映画史料発掘』に同梱されていたものか、別途郵送されたものかは不明。) に入っていたもの。

・12月15日 (火) :『一、小松宮殿下が活動写真を御覧になったのはいつか』を、この日付で、国立国会図書館に納本する (国立国会図書館よりの納本通知葉書による。書名は、通知葉書のものを転記したが、つまり『映画史料発掘』(第1号) である)。

◇昭和46（1971）年：42歳

・ 1月25日（月）：この日付で発行された『映画史料発掘・2』の印刷費見積書「27.300円」（500部、東京都中央区八丁堀3-17-3・東京真宏印刷㈱。以下、18号分まで同印刷所の為、3号から18号は印刷所名を省略）有り。領収書は日付無し。
・ 3月22日（月）：『映画史料発掘・2』、「東京におけるキネトスコープの興行記録について」（17～32頁。以下、各号に通しのノンブルがあるが、表紙、或いは最終頁が白紙のような場合は本誌に記載そのものは無いが、通して数えるよう振られている）発行。
・ 3月24日（水）：『映画史料発掘・2』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。
・ 4月30日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘・3』の印刷費請求書、納品書「80.000円」（500部）有り。領収書は同年5月1日付。
・ 5月 7日（金）：『映画史料発掘・3』を、この日付で、国立国会図書館・収書部に納本する（国立国会図書館収書部よりの納本通知葉書による）。
・ 5月26日（土）：『映画史料発掘・3』、「活動写真最初の一年〈明治三十年〉の記録」（33～80頁）発行。表紙には「柴田勝　水野一二三　塚田嘉信」と表記され、柴田、水野両氏の調査記録・資料も反映されている。
・10月 7日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘・4』の印刷費請求書、納品書「77.000円」（500部）有り。領収書は日付無し。
・10月11日（月）：『映画史料発掘・4』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。
・10月28日（木）：『映画史料発掘・4』、「活動写真最初の一年／大阪における活動写真」（81～120頁）発行。表紙には「永見克也　塚田嘉信」と表記され、永見氏の調査も反映されている。

◇昭和47（1972）年：43歳

・ 1月19日（水）：この日付で発行された『映画史料発掘・5』の印刷費請求書、納品書「75.000円」（500部）有り。領収書は日付無し。
・ 1月24日（月）：『映画史料発掘・5』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。
・ 1月29日（土）：『映画史料発掘・5』、「続活動写真最初の一年」（121～160頁）発行。
・ 3月28日（火）：月村吉治（御園京平）氏編刊による『蒲田撮影所とその附近』に、「写真提供」（奥付の記載）、及び「図版、割付、校正等」（「あとがき」の記載による）の協力をする。
・ 6月 1日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘・6』の印刷費請求書、納品書「65.000円」（500部）有り。領収書は日付無し。
・ 6月 5日（月）：『映画史料発掘・6　続続活動写真最初の一年』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。
・ 6月 6日（火）：『映画史料発掘・6』、「続続活動写真最初の一年」（161～192頁）発行。表紙には「吉田智恵男　塚田嘉信」とあり、本文の冒頭の小見出しにも「吉田智恵男氏の調査資料を得て」と但し書きがある。奥付の号数表記は「⑥」（以下、号数表記に就いて、表紙と奥付とが異なる場合のみ、奥付の表記を注記する）。
・10月18日（水）：この日付で発行された『映画史料発掘・7』の印刷費請求書、納品書「65.000円」（500

部）有り。領収書も同日付。

・10月28日（土）：『**映画史料発掘・7**』、「続続続活動写真の最初の一年」（193 ～ 224頁）発行。表紙には「藤川治水　塚田嘉信」とあり、やはり本文の冒頭の小見出しにも「藤川治水氏の御協力を得て」と但し書きがある。奥付の号数表記は「⑦」。

◇昭和48（1973）年：44歳

・ 2月10日（土）：この日付で発行された『映画史料発掘・8』の印刷費請求書「15.000円」（500部）有り。領収書は日付無し。

・ 2月15日（木）：『**映画史料発掘⑧**』、「活動写真最初の一年〈補遺〉」発行。7号までの冊子形態と異なり、1枚のたたみ物で、頁数の記載無し。

・ 4月 1日（日）：御園京平氏による活動資料研究会（大田区蒲田5-9-12　月村方）の『かつどう №22』発行。『「マダムと女房」以前　特集・音の出る活動写真』号に、「調査　塚田嘉信」として協力。

・ 4月13日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘・9』の印刷費請求書、納品書、物品受領書「16.500円」（500部）有り。領収書は日付無し。

・ 4月15日（日）：『**映画史料発掘⑨**』、「京阪神における活動写真」発行。「⑧」号同様、1枚のたたみ物で頁数記載無し。

・ 6月15日（金）：『**映画史料発掘・10**』、「新居系ヴァイタスコープについての新資料　ジュレールと『明治の日本』をめぐって」（237 ～ 268頁）発行。再び冊子形態となる（以下、同誌の形態に就いて表記しない場合は総て冊子形態）。奥付の号数表記は「⑩」。

・ 6月22日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘・10』の印刷費請求書、領収書「98.000円」（500部）有り。尚、請求書の「月日」、「品名」欄には、「5月16日」、「映画史料発掘　『日本映画最初の資料について』」と、「6月21日」、「映画史料発掘10」の2行があり、それぞれが500部となっていて、金額も「28.000円」と「70.000円」に分けられている。「映画史料発掘　『日本映画最初の資料について』」は、発行された『映画史料発掘』には無く、詳細は不明である。

・ 7月20日（金）：活動資料研究会（大田区蒲田5-9-12　月村方）の『かつどう　№23』発行。『プロダクション小史』号に、「調査　塚田嘉信」として協力。

・ 8月 2日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘・11』の印刷費請求書「22.000円」（500部）有り。領収書は8月6日付。

・ 8月 2日（木）：『映画史料発掘・8』～『同・11』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。

・ 8月15日（水）：『**映画史料発掘・11**』、「活動写真最初の一年／名古屋における活動写真」（269 ～ 276頁）発行。表紙には「池永三郎　塚田嘉信」と表記され、池永氏の調査も反映されている。奥付の号数表記は「⑪」。

・10月15日（月）：この日付で発行された『映画史料発掘・12』の印刷費請求書「20.000円」（500部）有り。領収書は10月22日付。

・10月28日（日）：『**映画史料発掘⑫**』、「明治32年〈一八九九〉　東京における活動写真〈その1〉」発行。1枚のたたみ物、頁数記載無し。

・11月 9日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘・13』の印刷費請求書「35.000円」（500部）有り。領収書は11月13日付。

・12月 1日（土）：『映画史料発掘⑬』、「ジュレールと『明治の日本』をめぐって 〈その2〉」（285 ～ 300頁）発行。

◇昭和49（1974）年：45歳

・ 1月24日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘・14』の印刷費請求書「22.000円」（500部）有り。領収書は1月25日付。
・ 2月14日（木）：『映画史料発掘⑭』、「明治32年／東京における活動写真 〈その3〉」（301 ～ 332頁）発行。
・ 4月 2日（火）：この日付で発行された『映画史料発掘・15』の印刷費請求書「55.000円」（500部）有り。納品書、領収書は日付無し。
・ 4月15日（月）：『映画史料発掘⑮』、「明治32年までの補遺と年表」（333 ～ 356頁）発行。
・ 5月16日（木）：『映画史料発掘・12』～『同・15』を、この日付で、国立国会図書館に納本する（国立国会図書館よりの納本通知葉書による）。
・10月25日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘・16』の印刷費請求書、納品書「20.000円」（500部）有り。領収書は日付無し。
・10月28日（月）：『映画史料発掘⑯』、「活動写真最初の一年 北海道における活動写真」発行。1枚のたたみ物、頁数記載無し。「池田博明・調査 塚田嘉信・編述」とあり、池田氏の調査が反映されている。

◇昭和50（1975）年：46歳

・ 6月 1日（日）：「敬服の他なし」を『文芸雑魚』第72号（25頁）に発表。発表誌『文芸雑魚』の発行の労をねぎらう内容であり、投稿なのか、或いは私信が掲載されたか、不詳。
・ 7月15日（火）：『映画史料発掘⑰』（363 ～ 366頁）発行。『映画史料発掘⑱』発行。「⑱」号は1枚のたたみ物、頁数の記載無し。
・ 7月24日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘・17』と『映画史料発掘・18』の印刷費請求書「38.000円」（500部）有り。それぞれの内訳は、『17』が「22.000円」、『18』が「16.000円」。領収書は日付無し。「東京真宏印刷」はこの号まで。
・11月 7日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘⑲』の印刷費請求書、領収書「40.000円」（500部、東京都墨田区堤通2丁目19番15号 久米誼幸。久米誼幸氏は久米利一氏のペンネームで、『文芸雑魚』の発行者。以下、23号分までは同者による印刷であり、同号まで印刷者名を省略）。
・11月17日（月）：『映画史料発掘⑲』、「フランソワ＝コンスタン・ジレール と ダニエル・グリム・クロースについて 吉田智恵男」（371 ～ 378頁）発行。塚田氏は、巻末2頁にわたって「ブラッチャリーニが二人いた」を執筆。表紙下部の余白に「〈発刊五周年記念号〉」の記載、最終頁下部余白に「〈印刷・久米利一〉」（本号より以降、冊子形態のものは印刷人・久米利一氏の記載が最終頁に載る）の記載有り。
・12月12日（金）：この日付で、久米利一氏から、「「映画史料発掘」をお読み下さる方へ」と見出しのある葉書サイズの通知書の印刷物（「初稿」と赤で書き入れたゲラ刷りがあり、その上に重ねて、恐らくは完成品と思われるものを綴じている）が届く。但し、この用紙と、恐らくは塚田氏宛て送付に使われた封筒の裏面に書かれた久米氏の住所と氏名の部分のみを切り取って、ホッチキスで留めたものが、『映画史料

自宅印刷所に並ぶ活字を背にした、久米利一氏と千勢子夫人。撮影・梶田章。
塚田氏宛ての梶田氏の書簡によれば、「昭和五十八年三月六日（土）の午後訪ねましたときに撮らせていただいたもの」とあるが、３月６日は正しくは日曜なので、曜日は誤記であろう。

発掘』の印刷領収書類と共に保存されており、それによる推測。15日には、その代金であろう、4000円の現金書留送った郵便局の「引受」の控えが一緒に留められている。恐らくは、次の『映画史料発掘⑳』を仲間に送付する際に同封したものと思われる（塚田氏所蔵による「『映画史料発掘』原本」、つまり自家用の『映画史料発掘』には、この用紙は⑲の最終378頁に「初稿」のゲラ刷りが貼り込まれている）。以下が、その「お読み下さる方へ」の全文（尚、「初稿」とされるものは、文末の日付箇所が、「昭和50年11月」と印刷されている）。

「〇本誌は調査しながら発行を続けておりますので、あとから新しい事実が判明したり、それまでの誤りに気づいたりすることがしばしばです。その場合は、気づいた時点でその都度補遺なり訂正のかたちで記録するようにつとめておりますから「補遺」又は「訂正」の項には必らず目を通していただきたいと思います。そして、ご理解できにくい点、疑問の点がありましたらご遠慮なくおたずね下さい。

〇本誌をご参考になさる際には、222頁の〝あとがき〟をもう一度お読み願います。（なお、大阪朝日新聞はその後国会図書館で閲覧できるようになりました）。

〇本誌は少部数の私家版であり非売品で、日ごろご交際をいただいている方々にしか頒布できず、ご希望の方すべてに差しあげるわけにはまいりませんので、ヒトさまにはご宣傳下さいませんように。

昭和　　年　　月　　塚田嘉信」

・12月　　日（　）：松司氏の経営する㈲塚田商店（線香用青竹ペーストの販売）が解散、廃業する。昭和24（1949）年9月より満25年3ヶ月の営業（「私の一生」）。

◇昭和51（1976）年：47歳

・ 1月　1日（木）：「キネ旬のロック ―誰かロックを知らないか―」を『文芸雑魚』第79号（2～3頁）に発表。『キネマ旬報』の第6号、9号が未見なので持っている人がいれば見せて欲しいと呼び掛ける。

- 1月 1日（木）：松司氏、「私の一生」の執筆に取り組む決意をする（「私の一生」）。
- 2月 3日（火）：この日付で発行された『映画史料発掘⑳』の印刷費請求書、領収書「40.000円」（500部）有り。
- 2月17日（火）：『**映画史料発掘⑳**』、「明治33年／京阪神における活動写真、明治33年／名古屋における活動写真」（379 ～ 386頁）発行。但し、379頁から382頁は1枚のたたみ物で、383頁から386頁は冊子形態。
- 3月15日（月）：**「浅草電気館覚え書き」**を『文芸雑魚』第81号（10 ～ 12頁）に発表。この年2月29日に閉館した同館の、開館以降閉館までの略年表。我が国の所謂「常設館」第1号であり、塚田氏も「長い間六区に親しんできたものとしては、やはり一抹の淋しさを禁じえない。」と書く。
- 4月 7日（水）：この日付で発行された『映画史料発掘㉑』の印刷費請求書、領収書「29.950円」（500部）有り。
- 5月10日（月）：この日付で発行された『映画史料発掘㉓』の印刷費請求書、領収書「20.000円」（500部）有り。
- 5月17日（月）：『**映画史料発掘㉑**』、「日本における最初の映画文献　大東楼主人著『自動写真術』（全文）」（387 ～ 392頁）発行。表紙下部の余白に「活動写真渡来八十年記念号」の記載有り。この号のみ、印刷文字全てに赤インクを使用。
- 7月15日（木）：『**映画史料発掘㉒**』、「明治33年　東京」（393 ～ 396頁）発行。明治33年の東京公開の新聞広告を1枚のたたみ物に収録。
- 7月15日（木）：『**映画史料発掘㉓**』、「明治33年／東京における活動写真」（397 ～ 400頁）発行。
- 9月 1日（水）：御園京平氏編による『画譜大河内傳次郎』（活動資料研究会刊）に、都村健、奥田久司の各氏と共に「本書刊行に際し何かとご尽力頂いた」（「あとがき」の記載による）とある。具体的な「尽力」内容は不詳。
- 10月15日（金）：『**映画史料発掘㉔**』、「明治33年／東京における活動写真(2)」（401 ～ 408頁）発行。
- 11月21日（日）：この日付で発行された『映画史料発掘㉕』の「前金」領収書29.950円」有り。この号に限って「前金」で支払ったかは不明。5月以降、この日までに久米氏が転居したと思われ、住所が「東京都足立区保木間町3444番地8」に移転。また、名義が「久米利一」と本名になる（以下、昭和54年8月15日付の「㉞、付録6代金」の領収書まで同様の住所と名前のゴム印を使用）。

◇昭和52（1977）年：48歳

- 1月 9日（日）：この日付で発行された『映画史料発掘㉕』の印刷費請求書、領収書「29.950円」有り。
- 1月15日（土）：『**映画史料発掘㉕**』、「明治33年／東京における活動写真(3)」（409 ～ 420頁）発行。
- 3月27日（日）：この日付で発行された『映画史料発掘㉗』の印刷費請求書、領収書「20.000円」（500部）有り。但し、4月27日に「㉖」の請求書が発行されており、この「3月27日」は、同号の発行日を考えても「5月」か「6月」の誤記ではないかと推測する。
- 4月27日（水）：この日付で発行された『映画史料発掘㉖』の印刷費請求書、領収書「40.000円」（500部）有り。
- 5月26日（木）：『**映画史料発掘㉖**』、「明治33年／東京における活動写真〈4〉　鴈治郎の『紙屑屋』をめぐって」（421 ～ 428頁）発行。柴田勝氏と塚田氏の対談形式。表紙下部の余

白に「〈祝柴田勝氏八寿記念号〉」と有り、この年、5月26日に八十歳を迎える柴田勝氏の記念の号。一般的には八十歳は「傘寿」とするが、塚田氏は「八寿」としている。或いは誤記か、塚田氏の洒落か。

- 6月 2日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘㉘』の印刷費請求書、領収書「40.000円」（500部）有り。但し、領収書は「6月1日」付。
- 7月15日（金）：『**映画史料発掘㉗**』、「明治33年／東京における活動写真〈5〉」（429～432頁）発行。
- 8月29日（月）：この日付で発行された『映画史料発掘㉙』の印刷費請求書、領収書「60.000円」（500部）有り。
- 10月28日（金）：『**映画史料発掘㉘**』、「明治33年／東京における活動写真〈6〉」（433～440頁）発行。
- 12月25日（日）：この日付で発行された『映画史料発掘㉚』の印刷費請求書、領収書「20.000円」有り。「数量」の項が「400」とあり、それまでの500部から400部へと変更している。

◇昭和53（1978）年：49歳

- 1月15日（日）：『**映画史料発掘㉙**』、「明治33年／北海道における活動写真」、「高木某とは誰か」（441～452頁）発行。最終頁に「500部製作の内　№__　」として、限定番号を記入する欄があり、あとがきとして「これで明治33年（一九〇〇）までの分をおわります。～このあと、しばらく休んで事情が許せば20世紀に進みたいと思っています。～本号をもって、ひと区切りついたことになりましたので、既刊号とあわせてご自由な方法で製本されてご愛蔵いただければ幸いです。」という言葉が書かれている。
- 1月17日（火）：『**映画史料発掘㉚**』、「高木某とは誰か　―解決篇―　」（453～456頁）発行。書簡を引用する形で「『高木永之助』は横田永之助氏であった」を太田垣實氏による執筆として収録。2日前の「㉙」号で「しばらく休んで」としていたが、問題解決を受けて急遽、発行を迫られた。
- 2月25日（火）：『**映画史料発掘〈号外〉**』、「〝日本映画史最初の資料〟には　まだ、そのあとがあった」（457～458頁）発行。文末に「次号の発行が未定のため、取敢えず号外として速報します。」とあり、荒尾親成氏が雑誌『神戸貿易』に発表した『神戸又新日報』紙上の神港倶楽部のキネトスコープ公開日延広告のことを報告している。
- 3月 1日（水）：この日付で発行された『映画史料発掘・号外』の印刷費請求書、領収書「10.000円」（400部）有り。但し、「2月24日付」で、久米氏宛てに同額を郵便振替にて、御茶ノ水局より振り込んだ「受領証」がある。従って、「3月1日」は書類上の日付で、実際には2月24日以前に届いていたのか。或いは、塚田氏が電話等で額を聞いて先に支払ったか。
- 4月15日（土）：塚田嘉信氏と久米利一氏の対談「**一〇二号対談**」を『文芸雑魚』第103号に発表。久米氏は『文芸雑魚』発行者だが、塚田氏が同誌102号に於ける誤記、誤植や安易な言葉の使い方を指摘する。
- 4月22日（土）：この日付で、久米氏宛てに『映画史料発掘㉛』印刷費20.000円を郵便振替にて、御茶ノ水局より振り込んだ「受領証」有り。但し、久米氏から送られた請求書、領収書は「53年4月」としかなく、日付の記入は無い。
- 5月11日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘㉜』の印刷費領収書「20.000円」（400部）有り。但し、請求書は「7月15日」の記載が有る。

・ 5月15日（月）：塚田嘉信氏と久米利一氏の対談「**一〇三号対談**」を『文芸雑魚』第104号に発表。
・ 5月26日（金）：『**映画史料発掘㉛**』、「横田永之助氏について」（459 ～ 462頁）発行。
・ 7月15日（土）：『**映画史料発掘㉜**』、「横田永之助氏について」（463 ～ 466頁）発行。
・ 7月15日（土）：塚田嘉信氏と久米利一氏の対談「**炎暑対談**」を『文芸雑魚』第106号に発表。
・ 8月28日（月）：午後5時半より「京橋プルニエ」（中央公論ビル7階）で開催された「吉田智恵男氏出版記念会」（『もう一つに映画史』）に出席。会の発起人は、川喜多かしこ、清水晶、鳥羽幸信、加太こうじ、嶋地孝麿、佐藤忠男。
・10月 8日（日）：この日付で発行された『映画史料発掘㉝』の印刷費請求書「20.000円」（400部）有り。但し。請求書日付は「㉜」と同じ「5月11日」と有り、混乱が見られる。
・10月 8日（日）：『**映画史料発掘㉝**』、「横田兄弟商会の成立について」（467 ～ 470頁）発行。

◇昭和54（1979）年：50歳

・ 4月 2日（月）：この日付で発行された『映画史料発掘　付録ハガキ』の印刷費請求書、領収書「5.500円」（400部）有り。「明治26年5月14日付大阪朝日新聞」紙上の「エヂソンの新発明（蓄動器）」記事をハガキにしたものだが、ハガキには「映画史料発掘／付録」とあるのみで、付録の番号は無い。
・ 5月26日（土）：この日付で発行された『映画史料発掘・付録2、付録3』の印刷費請求書、領収書「11.000円」（各5.500円、各400部）有り。
・ 7月 1日（日）：御園京平氏編による『写真阪妻映画』（活動資料研究会刊）に、「編集に協力」（「あとがき」による）する。但し、本書は同年5月1日に完成・納品されていたが、「製本の段階において断切を誤」った為に配布を中止し、印刷所が改めて作り直したもの。
・ 7月20日（金）：戦前に於ける芸能関係文献情報誌でもある『宝塚文藝図書館月報』のうち、8巻1号（81号）から9巻1号（94号）までの14冊を、古書店（平沢書店）より購入。
・ 8月15日（水）：この日付で発行された『付録4、5分』の印刷費領収書「11.000円」、同日付の『㉞、付録6代金』の印刷費領収書「25.500円」、計2通有り。但し、いずれも『映画史料発掘』という記載は無く、また請求書も無い。
・10月28日（日）：『**映画史料発掘㉞**』、「横田兄弟商会の夷谷座の興行をめぐって」（471 ～ 474頁）発行。

◇昭和55（1980）年：51歳

・ 2月26日（火）：この日付で発行された『付録４ｐ、たとう』の印刷費請求書、領収書「26.000円」（付録４ｐ、20.000円、たとう6.000円、各400部）有り。『映画史料発掘』の但書は無い。また、請求書は「久米」と書いただけで、住所記載のゴム印の使用は無い。
・ 5月 8日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘㉟』の印刷費請求書、領収書「22.000円」（400部）有り。請求書は「久米利一」と名前のみ書き、住所記載のゴム印は使用せず。
・ 6月11日（水）：『宝塚文藝図書館月報』の2号から5巻12号（54号）までの合本（3号、5号の2冊欠）を、京都の京極書房の古書目録により購入（注文は5月21日）する（古書目録の記録による）。その後、欠号の第1号を国会図書館、3号、5号を大阪の肥田晧三氏に依頼して関西大学図書館、それぞれの蔵書よりコピーして補う。因みに、『宝塚文藝図書館月報』は9巻1号（94号）より『宝塚科学図書館月報』と改題し、

次の9巻2号（95号）で戦前分は終刊となる。

・ 6月23日（月）：『**映画史料発掘㉟**』、「明治34年　京都における活動写真」（475 ～ 478頁）発行。

・ 6月25日（水）：この日付で、本地陽彦が塚田嘉信氏に宛てて初めて手紙を投函する（新宿局の消印は「55.6.27　8-12」）。本地が入手した『実地応用　近世新奇術』に関して、塚田氏の所蔵する版が『映画史料発掘』に紹介されているのを知り、本地が入手したものと異なる記述が少なくなかったことから、便箋6枚を使って塚田氏に問い合わせたもの。当時、本地は新宿区の古書展員であり、住まいは店に近い中野区東中野のアパートだった。

・ 6月29日（日）：この日付の消印（本郷局「80.6.29　8-12」）で、塚田氏より本地宛の返信ハガキが届く。ハガキは『映画史料発掘　付録①』を使用。

・ 7月20日（日）：本地が塚田氏宅を初めて訪問する。

・ 8月15日（金）：この日付で発行された『映画史料発掘㊱』の印刷費請求書、領収書「22.000円」（400部）有り。請求書は「久米利一」と名前のみ書き、住所記載のゴム印は使用せず。

・10月28日（火）：『**映画史料発掘㊱**』、「明治34年　大阪における活動写真」（479 ～ 482頁）発行。

・11月17日（月）：『**日本映画史の研究　活動写真渡来前後の事情**』（現代書館）上梓。既刊の『**映画史料発掘**』より明治29（1896）年～ 30（1897）年の記録、考証を再整理し、1冊に纏めたもの。四六判、318頁、定価3200円。巻末に「日本映画史年表〈明治23 ～ 30年〉」を収録。帯に岩崎昶氏の推薦文を記載する。発行日は、キネトスコープが小松宮に初めて披露された日に因む。

・　月　日（　）：『**映画史料発掘・付録〈発刊十周年記念〉**』（「付録」の「1」から「6」までは絵葉書仕様、「7」は絵葉書大2つ折り「付録について」4頁。但し「1」のみ号数表記無し。この「1」から「7」までをタトウに収める）発行。「7」の文末に「付録はこれで終りです。すでに差しあげました分とあわせて、同封のたとうに入れてご整理ください。」とあり、『映画史料発掘』を毎号送付する相手に対し、「1」から「6」の絵葉書は完成の都度、それぞれ送付し、最終の「7」の送付の際、タトウを一緒に「同封」したものと推測する。「1」～「5」の発行は「MCMLXXIX」、「6」、「7」の発行は「MCMLXXX」のローマ数字による発行年度の記載あり。但し、本地の記憶では、初めて塚田氏を訪問した際にそれまで発行した『映画史料発掘』一揃いを譲り受けているが、そこにはタトウも含めた「付録」の全てが含まれていたので、この年の前半には「7」までの発行を終えていたと推測する。　タトウには、「製作著作・塚田嘉信　意匠協力・喜多川周之　撮影協力・森田一朗　印刷・久米利一」とあり。

◇昭和56（1981）年：52歳

・ 6月18日（木）：この日付で発行された『映画史料発掘　号外６ｐ』の印刷費請求書、領収書「33.000円」（400部）有り。請求書は「久米利一」と名前のみ書き、住所記載のゴム印は使用せず。但し、請求書の「品名」は『映画史料発掘』以外に、「私製はがき」等、『映画史料発掘』以外の項目が3項目あり、合計の請求額は「36.940円」と有る。『号外６ｐ』とあるのは、「『日本映画史の研究』その後　―明治30年の興行記録・補正」のこと。

・10月15日（木）：塚田嘉信氏と久米利一氏の対談「**一三七号対談**」を『文芸雑魚』第138号に発表。

・　月　　日（　）:『**映画史料発掘／号外**』、「『日本映画史の研究』その後　―明治30年の興行記録・補正」（483 ～ 488頁）発行。発行日は「MCMLXXXⅠ」とローマ数字による記載あり。

・12月　6日（日）: この日付で発行された『映画史料発掘　号外／4頁』の印刷費請求書、領収書「22.000円」（400部）有り。請求書は「久米利一」と名前のみのゴム印。『号外／4頁』は、「『日本映画史の研究』その後②　もうひとつの活動写真　―長崎へ来たプロジェクトスコープ―　」のこと。この額と別に、12月11日付で、5.000円を郵便振替にて御茶ノ水局より振り込んだ「受領証」が有るが、何の代金か不明。

◇昭和57（1982）年：53歳

・　月　　日（　）:『**映画史料発掘／号外**』、「『日本映画史の研究』その後②　もうひとつの活動写真　―長崎へ来たプロジェクトスコープ―　」（489 ～ 496頁）発行。発行日は「MCMLXXXⅡ」とローマ数字による記載あり。

・12月14日（火）: この日付で発行された『映画史料発掘　号外』の印刷費請求書、領収書「24.000円」（350部）有り。請求書は「久米」とのみ手書き。『号外』は、「『日本映画史の研究』③　もうひとつの活動写真　〈承前〉―長崎へ来たプロジェクトスコープ―」のこと。『映画史料発掘』の久米氏への印刷依頼は、この号が最後となる。『映画史料発掘』第1号からこの号までの印刷総経費（飽く迄、印刷所に支払った印刷実費のみである）は、1.490.700円になる。

◇昭和58（1983）年：54歳

・　月　　日（　）:『**映画史料発掘／号外**』、「『日本映画史の研究』③　もうひとつの活動写真　〈承前〉　―長崎へ来たプロジェクトスコープ―　」（497 ～ 500頁）発行。発行日は「MCMLXXXⅢ」とローマ数字による記載あり。但し、文末に「（82・12・1）」の記載、また次号の「特別号」奥付がこの年の「1月1日発行」であり、通しのノンブルも「特別号」より前なので、実際には82年末の発行か。尚、見出しタイトルは「『日本映画史の研究』その後③」とすべきところの誤記と推測。

・1月　1日（土）:『**「映画史料発掘」特別号**』、「香港および上海における初期映画上映の記録」（501 ～ 514頁）発行。この「特別号」は、塚田氏自身によるタイプの版下をコピーし、製本も手作りのもので、版型もこの号のみＢ５版。英字新聞を図版で取り込んでいる都合から、本文も横組みである。

・　月　　日（　）:『**雑誌「活動之友」総目次**』上梓。奥付は、「『活動之友』総目次　私家版＊一九八三」と記載。大正元年から同2年にかけて4冊発行された同誌の表紙、目次等と、『映画どうらく』終刊号の「映画史料研究リポート（4）中島敬一とその仲間たち」を、それぞれ原本からコピーしたものを、塚田氏が自ら手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。発行部数は記載無く不明。

・　月　　日（　）:『**雑誌「活動之世界」総目次**』上梓。奥付は、「雑誌『活動之世界』総目次　私家版／一九八三」と記載。大正5年から同8年にかけて40冊発行された同誌の、主に目次頁を原本からコピーしたものを、塚田氏が自ら手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。巻頭に全冊の表紙を7頁に亘って、巻末に「雑誌『活動之世界』特集記事並びに定価一覧」を1頁に収録する。発行部数は記載無く不明。

・　月　　日（　）:『**雑誌「活動之友」「活動之世界」総目次**』上梓。上記の2冊、『雑誌「活動之友」総目次』、『雑誌「活動之世界」総目次』を合冊、製本したもの。共通の奥付は無く、それぞれにある。この合冊版は第三者に配布したか不詳（塚田氏コレクションに現存）。

・　月　　日（　）:『**明治～大正初期の映画雑誌について**』上梓。塚田氏の創刊号コレクションから、明治期、大正期の映画雑誌に就いて、原本からの表紙、目次コピーに加え、自身でタイプした書誌的解説を加え、塚田氏が自ら手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。奥付は、「明治期」、「大正期」それぞれに、「明治期に発行された映画雑誌について」、「大正初期の映画雑誌について」として「私家版＊一九八三」と付けられている。発行部数は記載無く不明。但し、中山信如氏の「塚田嘉信の本」（『古本屋「シネブック」』漫歩』所収）には、「明治期に発行された映画雑誌について」のみの所蔵者が確認されているとのこと。「大正期」が単独で作られたか不詳。

・　月　　日（　）:『**「映画史料発掘」特集号　「ジゴマ」追跡**』を製作。『東京朝日新聞』の大正元年10月に8回連載された記事、及びその後の関連記事を、Ｂ５版20頁に亘って自身でタイプ、コピーするが、「製作一時中止」する。結果として未刊に終る。

◇昭和59（1984）年：55歳

・4月　1日（日）:『**ブルーバード映画の記録**』上梓。山中十志雄氏と共著。「〔1〕日本で公開されたいわゆる〝ブルーバード映画〟の興行記録」、「〔2〕ブルーバード映画〝新聞広告〟これくしょん」、「〔3〕題名索引」、「〔4〕フィルム・リスト」、「〔5〕未輸入ブルーバード映画一覧」からなる。図版、タイプ印刷をコピーしたものを、手作り製本したもの。限定20部。

・4月20日（金）:『**ブルーバード映画　通信**』上梓。山中十志雄氏と共著。『ブルーバード映画の記録』の、「訂正と補遺」、大正期の雑誌よりの「ユニヴァーサル映画の思ひ出」のコピー記事等で構成。発行部数は記載無く不明。

・8月　1日（土）:『**ブルーバード映画の記録〈追補〉**』上梓。山中十志雄氏と共著。『ブルーバード映画の記録』の「正誤表」、「その後の調査によって判明した事柄」、「レッド・フェザー映画一覧」、「バタフライ映画一覧」、などで構成する。発行部数は記載無く不明。

◇昭和60（1985）年：56歳

・3月　　日（　）:『**ブルーバード映画の記録　〈資料復刻〉雑誌「ユニヴァーサル」より　思い出集**』上梓。山中十志雄氏と共著。大正15（1926）年1月号から昭和2（1927）年6月号にかけての雑誌『ユニヴァーサル』原本より10本の記事をコピーしたものを製本したもの。奥付に「20部製作」とあり。

・8月　1日（水）:『**映画雑誌創刊号目録・続補遺篇**』上梓。奥付に発行日のほか、「東京都文京区湯島2-27-5　塚田嘉信／私家版」、「5部製作発行　非売品」とあり。和文タイプライターで原稿（版下）を作り、それをコピーしたものを袋綴じにして、自身で製本したもの。その後、奥付頁の余白に貼り込めるよう、正誤表が「〔訂正〕」として何度か更新するかたちで作られた。

・8月　5日（月）:『**映画雑誌創刊号目録・続補遺篇**』の「追加5部製作発行」分を上梓。但し、1日

付の刊本と、表紙のタイトルの活字サイズが異なる（大きくなる）。

・　月　　日（　）:『〝入場税と映画館の入場料〟の変遷』上梓。昭和13（1938）年4月1日の「支那事変特別税法」による入場税の導入から、昭和50（1975）年4月1日に至る税率、及び封切館の入場料金等の変遷を、年表型式で記したもの。加えて、昭和19（1944）～20（1945）年の「東京都映画興行場戦災館一覧」、「日比谷映画劇場開場以来の正月興行入場料金一覧」を付す。塚田氏自身がタイプしたものを版下にして、手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。製作部数は記載無く不明。「あとがき」横に、「使用済入場券の半券（実物）」として、半券実物を添付する。奥付の刊年は「私家版／ 1985」とあるが、「あとがき」の文末に「（1984・10）」とあるように、配布は1984（昭和59）年秋頃に始まった。尚、付け加えれば、入場税は、平成元（1989）年4月1日の消費税導入により廃止された。

◇昭和61（1986）年：57歳

・ 1月13日（月）:『「乙種フィルム目録」について』発行。塚田氏が「長い間探している」日本活動写真株式会社が発行した同目録について、若干の解説とその発行日を推測（それまでの発行時期の俗説を正す）する。Ｂ４サイズにタイプ印刷したものを、1枚刷りコピーとして配布したもの。文末に発行日（製作日）を記す。製作部数不明。

・ 1月20日（月）:『第二次映画雑誌統合時代〈昭和１９～２０年〉　「映画評論」「新映画」「日本映画〈改新号〉　総目次』上梓。3種の映画雑誌の該当する時代の各第1号の表紙コピーに加えて、各号の目次、更に解題、「あとがき」を塚田氏自身がタイプしたものを版下にして、手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。製作部数は記載無く不明。

・ 5月　9日（金）:『文芸雑魚』発行者で、『映画史料発掘』の19号よりの印刷を請け負った久米利一氏が、胃癌のため千代田区内の病院で死去。49歳。

・12月　1日（月）:『新東宝映画の公開記録』上梓。新東宝製作作品の、「新版改題再公開」作品も含めた全作品の公開リスト。塚田氏自身がタイプしたものを版下にして、手作り（袋綴じ）で製本し1冊に纏めたもの。最終頁に「（配布番号　　）」という欄があり、番号は後から記入するようになっている。製作部数は記載無く不明。

◇昭和62（1987）年：58歳

・ 1月　　日（　）:『素稿　河合映画の公開記録　その１　昭和３年』を『塚田嘉信・私家版№1』（3枚、1～6頁）として発行。Ｂ４サイズのタイプ原稿をコピーして2つ折りにしたもので、未製本のまま配布。「あとがき」には、「和文タイプライターをいじりはじめて五年目になるが、今年から今までのような単発的散発的なやりかたをやめて、すべてこの私家版に一本化することにしました。」とある。刊記は「昭和62年1月発行」とのみ記載。発行部数不明。このタイトルは、当然のこと乍ら「日本映画史素稿」を意識したものであろう。

・ 2月　　日（　）:『素稿　河合映画の公開記録　その２　昭和４年』を『塚田嘉信・私家版№2』（2枚、7～10頁）として発行。

・ 3月　　日（　）:『素稿　河合映画の公開記録　その３　昭和５年』を『塚田嘉信・私家版№3』（2枚、11～14頁）として発行。

・ 4月　日（　）:『素稿　河合映画の公開記録　その４　昭和６年』を『塚田嘉信・私家版№.4』(2枚、15 ～ 18頁）として発行。
・ 5月　日（　）:『素稿　河合映画の公開記録　その５　昭和７年』を『塚田嘉信・私家版№.5』(2枚、19 ～ 22頁）として発行。
・ 6月　日（　）:『素稿　河合→大都映画の公開記録　その６　昭和８年』を『塚田嘉信・私家版№.6』(3枚、23 ～ 28頁）として発行。
・ 7月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その７　昭和９年』を『塚田嘉信・私家版№.7』(3枚、29 ～ 34頁）として発行。
・ 8月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その８　昭和10年』を『塚田嘉信・私家版№.8』(2枚、35 ～ 38頁）として発行。
・ 9月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その９　昭和11年』を『塚田嘉信・私家版№.9』(2枚、39 ～ 42頁）として発行。
・10月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その10　昭和12年』を『塚田嘉信・私家版№.10』(2枚、43 ～ 46頁）として発行。
・11月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その11　昭和13年』を『塚田嘉信・私家版№.11』(2枚、47 ～ 50頁）として発行。
・12月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その12　昭和14年』を『塚田嘉信・私家版№.12』(2枚、51 ～ 54頁）として発行。巻末に「おことわり」として、「本記録は『素稿』であって『決定稿』ではありません。」、「第一段階としては『キネマ旬報』の記録だけで『素稿』を作り、不明な箇所を明確にし、『素稿』が一段落したあとで『河合・大都映画の公開記録の研究』として不備な点を補うつもりです。」とある。但し、『河合・大都映画の公開記録の研究』は未刊に終った。

◇昭和63（1988）年：59歳

・ 1月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その13　昭和15年』を『塚田嘉信・私家版№.13』(2枚、55 ～ 58頁）として発行。
・ 2月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その14　昭和16年』を『塚田嘉信・私家版№.14』(2枚、59 ～ 62頁）として発行。
・ 3月　日（　）:『素稿　大都映画の公開記録　その15　昭和17年』を『塚田嘉信・私家版№.15』(1枚、63 ～ 64頁）として発行。64頁に「素稿・大都映画の公開記録　完」の記載がある。尚、本地はこの『塚田嘉信・私家版』に就いては、発行の都度ではなく、№.1から№.15を纏めて受け取っている（時期失念）。

◇平成元（1989）年：60歳

・ 2月16日（木）:『映画史料発掘〈号外〉』、「『日本映画史の研究』その後④　長崎におけるシ子マトグラフの公開資料」(515 ～ 518頁）発行。『映画史料発掘』の最終号。冒頭に「☆本稿は昭和五十八年一月一日発行の特別号『香港および上海における初期映画上映の記録』に続くものです。」の記載あり。塚田氏自身によるワープロ版下を両面コピーしたものと推測。
・12月　5日（火）: 辻恭平著『事典　映画の図書』(凱風社）発行。塚田氏所蔵図書を採録に提供する。口絵カラー図版に、『活動寫眞説明書』駒田好洋著、『幻燈器械及映画並ニ活動寫

眞器械及附属品定價表』吉澤商店、『ジゴマ』桑野正夫著の3点。本文頁に、『明治～大正初期の映画雑誌について』塚田嘉信著（収録頁、3頁）、『雑誌「活動之友」「活動之世界」総目次』塚田嘉信著（3頁）、『活動寫眞』榎本松之助（41頁）、『活動寫眞説明書　附エジソン氏史傳』（61頁）、『幻燈器械及映画並ニ活動寫眞器械及附属品定價表』吉澤商店（61頁）、『活動寫眞機械及フィルム定價表』日本活動寫眞株式会社（62頁）、『映画史料発掘』塚田嘉信（144頁）、『中華聯合製片公司の設立と中華映畫との關聯』中華映畫企劃部情報課（179頁）、『日活日興共同爭議經経過報告』日活日興共同爭議團残務整理委員会（334頁）、の9点の書誌情報を提供する。また、本文頁のところどころ10か所に「スケッチ」と題して収録された著者のコラムのうち、「その5　映画資料家」の中でも塚田氏が、以下の通りに紹介されている。「塚田嘉信氏は『映画資料発掘』を1970～1983年にかけて合計514頁、および『日本映画史の研究』や数種の研究冊子のある、明治期映画研究の第一人者。滅多に見られない『活動写真説明書』（駒田好洋、明治30年刊）を借覧した。」

◇平成2（1990）年：61歳

◇平成3（1991）年：62歳

◇平成4（1992）年：63歳

・ 7月14日（火）：『日本映像学会映画文献資料研究会報』の為の、塚田嘉信氏へのインタビュー取材を、塚田氏の自宅事務所（文京区湯島2-27-4、湯島台レジデンス１Ｆ）で行う。参加者は、研究会会員の牧野守、小笠原隆夫、篠田功、田島良一の各氏、及び特別参加として映画古書専門店である稲垣書店主・中山信行氏、そして本地陽彦の、合計6名である。

・11月10日（火）：『日本映像学会映画文献資料研究会報　1』、「第一回聞き書き　塚田嘉信氏に聞く」発行。7月14日に行われたインタビューを活字化したもので、編集・発行は同会、発行人は牧野守、編集人は田島良一の各氏。

◇平成5（1993）年：64歳

・12月　5日（日）：『日本映像学会映画文献資料研究会報　3』の為の、本地陽彦へのインタビュー取材を、本地の自宅（狛江市元和泉1－20－14）で行うに際し、特別参加する。他の会員参加者は、牧野守、小笠原隆夫、田島良一の各氏、塚田氏以外の特別参加として稲垣書店主・中山信行氏と入江良郎氏である。

◇平成6（1994）年：65歳

・ 6月　1日（水）：塚田嘉信氏も特別参加する『日本映像学会映画文献資料研究会報　3』、「第3回聞き書き　本地陽彦氏に聞く」発行。前年12月5日に行われた本地へのインタビューを活字化したもので、編集・発行は同会、発行人は牧野守氏。編集、製作作業は入江良郎氏による。

◇平成7（1995）年：66歳

・12月15日（金）：午前6時半に自宅で倒れ、午前7時半に、木村病院（荒川区町屋2-3-7）に救急搬送され、脳梗塞手術を受ける。

・12月22日（金）：午後8時15分死去。享年66。

◇平成　8（1996）年：

・ 1月14日（日）：菩提寺である真照寺（台東区上野6-6-1）にて法要。戒名は實諦院釈信順居士。

◇令和元（2018）年：

・ 4月25日（水）：塚田嘉信氏令妹の佐々木裕子氏、国立映画アーカイブに来訪され、塚田嘉信氏資料受け入れの交渉、始まる。

（未完）

謝辞：本研究はJSPS科研費20K00164の助成を受けたものです。